

発行：2015年3月

編集：山辺昌彦、山根和代、安斎育郎

イラスト：戸崎恵理子

事務局：戦争と平和の資料館ピースあいち 宮原大輔

住所：〒465-0091 名古屋市名東区よもぎ台2-820

Tel & Fax: 052-602-4222

第13回平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会を開催

宮原大輔

第13回平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会が、2014年10月25、26日の両日、川崎市の明治大学生田キャンパス（登戸）で開催されました。昨年開催の予定でしたが、台風により中止になりましたので、2年ぶりの開催となりました。

会場の明治大学生田キャンパスは、旧日本陸軍の秘密戦兵器開発のための研究所だった登戸研究所の跡地に建ち、2010年9月に登戸研究所の実験施設をそのまま保存活用した明治大学平和教育登戸研究所資料館が開館しました。

今回の交流会は、この登戸研究所資料館の見学、学習も兼ねたプログラムとなりました。全国からの参加者は27人、報告者は13人となりました。

特別報告として、登戸資料館館長で明治大学教授の山田朗先生の「自民党安倍政権下での歴史認識と歴史教育をめぐる現状と平和博物館の課題」と題して講演が行われました。後援では**1. 政界における歴史修正主義と「3談話」排斥、2. 教育の国家主義的再編＝「教育再生」に立ち向かうために、3. 戦争遺跡保存運動と平和博物館の課題**の3点にわたってお話がありました。

渡辺賢二さんは、交流会参加者を対象に資料館の展示ガイドを行っていただくと共に、「ここまで判ってきた陸軍登戸研究所の実相」と題した講演をしていただきました。

これらの講演を挟みながら、参加者の報告が以下のように行われました（順不同）。

- ・第8回国際平和博物館会議開催について
 - ・丸木美術館のアメリカでの原爆の図展開催計画について
 - ・中帰連の活動について
 - ・ピースおおさかの動向について
 - ・ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会の活動について
 - ・満蒙開拓平和記念館の活動について
 - ・原発災害情報センターの活動について
 - ・「記憶の暗殺者」と闘うミュージアム運動について
 - ・証言映像マップを活用した教育プログラムについて
 - ・平和教育地球キャンペーンの活動について
 - ・山梨平和ミュージアムの活動について
- 交流会は、最後に会計と人事についての報告を受け、来年の交流会を名古屋（ピースあいち）で開催することを確認しました。

このたびの交流会の開催にあたっては明治大学平和教育登戸研究所資料館の皆様大変お世話になりました。おかげさまで充実した交流会となりました。御礼申し上げます。



Erico

平和のための博物館・市民ネットワーク報告
2012.10.27～2014.10.24

合計 82人
入会 10人
退会 4人

●会計報告

収入

繰越（口座 80,750 円、現金 22545 円）

103,295 円

年会費 176,000 円

書籍販売 1,000 円

計 280,295 円

支出

印刷費 96,075 円

送料 87,774 円

講師謝礼 5,000 円

雑費 1,622 円

計 190,471 円

繰越 89,824 円

（口座 56,128 円、現金 33,696 円）

●内訳

年会費収入

2010 年度分 5 人 10,000 円

2011 年度分 10 人 20,000 円

2012 年度分 18 人 36,000 円

2013 年度分 39 人 78,000 円

2014 年度分 15 人 30,000 円

2015 年度分 1 人 2,000 円

印刷費

ミューズ 29 号 18,900 円

Muse27 号 15,750 円

ミューズ 30 号 15,750 円

ミューズ 31 号 31,500 円

ミューズ 32 号 14,175 円

送料

ミューズ 29 号 17,171 円

Muse27 号 23,710 円

ミューズ 30 号 15,631 円

ミューズ 31 号 15,631 円

ミューズ 32 号 15,631 円

●会員

2012 年以前まで納付 40 人

2013 年まで納付 26 人

2014 年まで納付 15 人

2015 年まで納付 1 人

●事業報告

ニュースの発行

ミューズ 29 号 2012 年 10 月

Muse27 号 2012 年 10 月

ミューズ 30 号 2013 年 6 月

Muse28 号 2013 年 6 月

ミューズ 31 号 2014 年 3 月

Muse29 号 2014 年 2 月

ミューズ 32 号 2014 年 8 月

第 13 回全国交流会の開催

2014 年 10 月 25 日～26 日

明治大学平和教育登戸研究所資料館にて

●体制

運営委員 浅川 保、池田理恵子、

梶慶一郎、宮原大輔、山辺昌彦

（退任）安田和也

（新任）石橋星志、常本 一、福島在行、

渡辺賢二

編集委員 山根和代、山辺昌彦、安斎育郎

事務局 宮原大輔（ピースあいち）

●事業予定

ニュースの編集発行

ミューズ 2 回、Muse 2 回

第 14 回全国交流会の開催

名古屋・ピースあいちにて



<第13回平和のための博物館・市民ネットワーク
全国交流会報告>

戦争と平和をどう伝えたか

ー YPM7年間の活動を通してー

山梨平和ミュージアム 浅川 保

2007年5月に山梨平和ミュージアム（YPM）が開館してから7年余が過ぎた。この間の活動を、
1、甲府空襲、甲府連隊、戦時下の暮らし 2、石橋湛山の生涯と思想 3、「平和の港」としての多面的な活動 4、今後の活動ー湛山平和賞などの4つの点から報告した。ここでは、紙幅の関係

で、1、2を省き、3、4について報告したい。

＜「平和の港」としての多面的活動＞ YPMとしては、1、2の常設展示の他に、これまで「戦場の記憶・記録展」「沖縄と山梨」「満州事変80年を考える」「日中国交回復40年と石橋湛山」「秘密保護法を考える」などの企画展を年2回、通算15回実施、現在、「日本国憲法と集団的自衛権を考える」を開催中である。

展示だけにとどまらず、戦争の記憶・記録を継承し、近現代史、現代の学習を深めようと、講演会、シンポジウムなど毎月の企画行事に取り組んできた。毎回、20～50名が参加、報告の後、活発な意見交換も行われ、文字通り「平和の港」のメイン行事として定着しつつある。昨年9月から今年1月までの企画行事のテーマは下記の通り。9月 石橋湛山生誕130年記念シンポジウム 10月 憲法9条にノーベル平和賞を 11月 沖縄基地問題の歴史と現状を考える 12月 平和教育シンポジウム 1月 戦時下の奉安殿と教育

＜今後の課題－湛山平和賞など＞ 戦後70年、戦争を体験した世代は徐々に減り、体験の継承も年々難しくなっている。私たちの課題は、市民参加型の活動を広げつつ、中、高、大学生など若者の見学者を広げ、戦争体験の次世代への継承をどう図るかである。そうした課題に応えようと、2012年、YPMとして、石橋湛山平和賞（中・高校生の部 一般の部で論文、エッセイを募集）を創設、今年で3回目を迎えた。今後、この賞の拡充等を進めていきたい。

2014年9月 第8回国際平和博物館会議 報告要旨

日本で「慰安婦」ミュージアムを維持することの意味～歴史修正主義と闘う「慰安婦」支援の市民運動

アクティブ・ミュージアム「わたしの戦争と平和資料館」館長 池田恵理子

日本軍の「慰安婦」制度が女性への重大な人権侵害であり、戦争犯罪であることが国際的な共通認識になったのは、被害者が名乗り出た1990年代からだが日本の国公立の戦争ミュージアムには「慰安婦」の展示がほとんど見当たらない。中学校の歴史教科書からは「慰安婦」記述は削除されてきた。首相をはじめとする政治家や右翼メディアや文化人が、「慰安婦」の存在を抹殺しようと、教育やメディアへの

圧力をかけ続けてきたからである。彼ら“記憶の暗殺者”たちはアジア太平洋戦争を「聖戦」とし、日本国憲法の改悪と「普通に戦争ができる国づくり」を目指している。一方、自国の加害責任に向き合い、被害者の支援と真相究明を行ってきた日本の女性運動と市民運動は、一貫して政府に問題解決を迫ってきた。2000年には被害国の人びとと世界の人権活動家と連帯して「女性国際戦犯法廷」を開催、昭和天皇など「慰安婦」制度の責任者を明らかにし、05年には「慰安婦」資料館・wamを創設した。歴史の事実を隠蔽・歪曲する行為はアジア諸国との間にナショナリズム対立と緊張関係をもたらす。日本は今や、「歴史に向き合えない国」「戦争責任を取れない国」として蔑まれている。何よりも、勇気をふるって名乗り出た高齢の被害者を、更に深く一層傷つけている。

自国の戦争責任に向き合い、戦時性暴力の記録と記憶を次世代に継承する営みは、被害者の救済だけでなく、現代の紛争下での性暴力を根絶するためにも不可欠である。“記憶の暗殺者”と対峙してきた者たちは、これからも国際連帯の力に励まされながら、日本の真の民主化と反戦平和を求めて、この闘いを続けていく。

【2014.10.26 平和のための博物館市民ネットワーク・全国交流会 報告要旨】

「記憶の暗殺者」と闘うミュージアム運動

アクティブ・ミュージアム「わたしの戦争と平和資料館」館長 池田恵理子

「慰安婦」被害者が乗り出るようになってから20年以上経つが、解決の兆しが見えないばかりか「慰安婦」の存在を否定しようとする歴史修正主義者が政治の中枢を握り、歴史の歪曲や捏造がメディアやネットに溢れかえっている。2014年8月朝日新聞が「慰安婦」報道検証を公表すると異様な朝日バッシングが始まり、「戦争ができる国」に邁進する安倍政権の下、教育界やメディア、地方自治体、平和ミュージアムなどさまざまな分野に「慰安婦」問題をタブー視する萎縮効果がみられるようになった。こうした背景には、慰安所設置が始められた日中戦争時代からの、日本軍の性暴力をめぐる隠蔽と言論圧殺の長い歴史がある。

「美しい国日本」を唱え、「先の戦争は正しか

った」とする安倍首相は、第1次安倍内閣時代から「『慰安婦』の強制の証拠はない」と主張し続けてきたが、「慰安婦」が性奴隷であり、女性への重大な人権侵害で戦争犯罪だったことは、アジアの被害国ばかりか世界中が知っている。一方、高齢となった各国の「慰安婦」被害者も、戦場体験のある元日本兵も最晩年を迎えている。日本政府は態度を改めて直ちに「慰安婦」調査を再開し被害女性が求める公式謝罪と賠償を実現すべきである。私たち日本人には、被害者の最後の証言を丁寧に聞き取り、戦争を知らない次世代にこの記憶と記録を引き継ぎ、戦時性暴力の再発防止に努める責務がある。

今や「慰安婦」被害を否定する“記憶の暗殺者”たちとの闘いは、戦争へ歩みを進めているファシズム政権との闘いの様相を帯びてきた。日本の戦後そのもの、民主主義そのものが問われている。wamは日本で唯一の「慰安婦」資料館として攻撃や嫌がらせにさらされてきたが、開館から10年。女性の人権を守る非戦・反戦のミュージアム運動を、今後も粘り強く続けていく。

平和資料館・草の家：高知



安部愛

2014年9月19日から22日にかけては、副館長の岡村啓佐（けいすけ）さんが韓国・ノグンリ平和公園で開催された「第8回国際平和博物館会議」に参加し、「『フクシマ』からの伝言—核と人類は共存できない！—」というテーマで写真やポスターを作成し、参加各国の人びとに向けてフクシマの現状について発表しました。

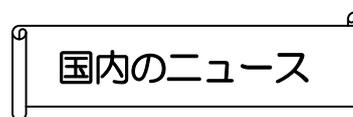
10月5日には、ジャーナリストの志葉玲（しばれい）さんによる現地取材報告会「パレスチナ・ガザのいま—まずは知ることから」が高知大学共通教育棟にて開かれました。報告のあと、愛媛県大学准教授の中西泰造さんとの対談もあり、会場からたくさんの質問や感想が寄せられました。草の家はじめ各団体・個人が集まったガザ報告実行委員会の主催。

2014年11月、平和資料館・草の家が民立民営の平和資料館として創立されてから25年目になりました。同月16日には、高知の反戦詩人・榎村浩（まきむらこう）の生誕100周年特集として準備

していた研究誌『ダッタン海峡10号』の出版記念祝賀会を兼ねた「草の家創立25周年記念のつどい」を高知縣市町村職員共済会館にて開き、県内外から180名が集まりました。第1部では、民権講師・馬鹿林一座の民権紙芝居、前草の家研究員・事務局長で現在は韓国にある民族問題研究所で働いている金英丸（キム・ヨンファン）さんは「いま、歴史の清算と東アジアの平和を考える」と題して記念講演をしました。第2部は、榎村浩の詩「ダッタン海峡」の朗読で幕を開け、料理や飲み物を片手にそれぞれ語り合い交流を深めた自由大懇親会となりました。

11月24日には、大集会&デモ行進「まもろう平和なくそう原発inこうち」が市内中央公園で開催され、約2000名が集まりました。3コースに分かれてのデモ行進後、ステージでは漫画『はだしのゲン』を講談化した講師・神田香織さんや、元東京電力社員・木村俊雄さんによるトーク、弾き語りやバンドによるライブ演奏、マルシェでは多くの出店もあり会場は賑わいました。原発をなくす高知の会、郷土の軍事化に反対する高知県連絡会、憲法懇談会の共催。

2015年1月18日には、毎年恒例の草の家新年交流会を開きました。大人気の餅つきは大人も子どもも混ざって代わる代わる杵を握り、つき立てのお餅を色々な味で楽しみました。手料理を囲み、歌や演奏の合間に関連行事や映画の紹介、また、1月初旬から数日間にわたり5度目の福島取材に行かれた岡村啓佐さんから報告もあり、その時撮影された写真を見ながら一同耳を傾けました。全体の参加者は約60名でした。



本別町歴史民俗資料館：北海道

企画展「7月15日 日本別空襲を伝える—北海道空襲のほんべつ」が2014年7月1日～8月30日の会期で開催されました。十勝管内で最大の被害が出た1945年7月15日の本別空襲を語り継ぎ、その歴史をふまえ、恒久的な平和を願い、後世へ伝えていくため、毎年開催している企画展です。当時の様子を伝える資料228点を展示していました。同空襲の弾痕が残るJA本別町の旧「大通り倉庫」の壁を企画展として初公開している他、爆

弾の熱で溶け、球状に固まったガラスや、空襲で炎上する市街地の空撮、被災地点の集落の地図も展示し、2階では、本別を含む道内5か所の空襲の様子を書籍などで紹介していました。

Tel:0156-22-5112

http://www.town.honbetsu.hokkaido.jp/living/c/6/post_44.html



釜石市郷土資料館:岩手

2014年度テーマ展「艦砲戦災資料展」が2014年7月12日～9月7日の会期で開催されました。今回のテーマ展は艦砲射撃による被災状況を紹介しながら、戦地と内地を結んだ軍事郵便など、この一年間に収蔵した資料の中から戦中の暮らしに関するものを新たに公開していました。

Tel&Fax:0193-22-2046

<http://www.city.kamaishi.iwate.jp/kyoudo/index.html>

仙台市戦災復興記念館:宮城

「戦災復興展」が2014年7月4日～13日の会期により地下1階の展示ホールで開催されました。仙台空襲についてのアメリカ軍の資料、占領下の仙台や復興計画に関するパネル、空襲前後の仙台市中心部の空中写真、仙台空襲犠牲者氏名板、墨絵「七・一〇之譜」などが展示されました。

Tel:022-263-6931 Fax:022-262-5465

http://www.city.sendai.jp/aoba/sensai/basic_info/index.html



福島県立博物館:会津若松市

ポイント展「伝単ー連合軍のまいたビラ」が2014年7月18日～8月22日の会期により常設展総合展示室近・現代で開催されました。空襲の目標の都市名を書いたものや、厭戦気分をあおるもの、日本の軍国主義を批判するものなどが展示されました。

Tel:0242-28-6000 Fax:0242-28-5986

<http://www.general-Museum.fks.ed.jp/>

玉村町歴史資料館:群馬

2014年度第19回企画展「戦争と玉村町ー軍隊・銃

後・空襲」が2014年7月17日～9月28日の会期で開催されました。1945年8月14日の夜中、玉村町は空襲を受け、死傷者が出ました。話はさかのぼりませぬ。昭和初年、アメリカとの対立が高まる中、アメリカの世界児童親善協会から「青い目の人形」が全国各地に贈られました。玉村小学校の「ルースちゃん」も、現在にまで引き継がれてきました。戦争がはじまると玉村町出身の兵士は中国大陸・ニューギニア・フィリピン・ビルマなどで戦いましたが、約600人の兵士が命を落としました。戦中は国全体の動員が要請されました。兵士だけではなく、非戦闘員も戦争遂行の体制に組み入れられました。防諜の監視体制、大日本婦人会の設置、物資の供出、貯金・戦争国債購入と勤労奉仕が強制されました。やがて大都市の空襲が激しくなると玉村町内の寺院・民家にも学童が集団疎開してきました。しかし8月14日の夜中、B29の空襲により伊勢崎・高崎周辺、そして玉村町が被害をうけました。これほどの被害を受けても玉村町の具体的な被害状況について当時の日本アメリカ両軍の報告書に記載はありません。その後地元で詳細な報告書が刊行されましたが、このように地元で伝えつづけていかないと忘れ去られてしまうこととなります。展示構成は、(1)「青い目の人形、幻の坂東飛行場、陸軍特別大演習」、(2)「軍隊」、(3)「銃後」、(4)「空襲」で、青い目の人形、幻の坂東飛行場・陸軍特別大演習・高崎歩兵第十五連隊関係資料、衣料切符など銃後における資料、焼夷弾などが展示されました。

関連して、記念講演会「米軍史料から見た群馬県下の空襲」が公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の菊池実さんを講師に8月9日に玉村町文化センター小ホールで開催されました。

Tex:0270-30-6180 Fax:0270-30-6183

http://www.town.tamamura.lg.jp/rekishi_bunka/rekishi_shiryokan/

埼玉ピースミュージアム<埼玉県平和資料館>:東松山市

「戦争を伝えるー写した戦争・描いた戦争」が2014年7月19日～9月7日の会期で開催されました。近代のはじめから、政府や軍などの公的機関、新聞社や出版社などの報道機関は、戦場にカメラマンや記者をはじめ、当代随一の画家を派遣し、戦争報道にしのぎを削りました。戦争のイメージを喚起させる写真や絵画は、広報宣伝用とし

て次第に大きな役割を担っていきました。一方、戦場の様子や個人の感情を自由に表現することが制限されていた時代、兵士は手記に、人びとは日記に、戦闘の実態や日々の生活、自らの想いや感情を書き記しました。本展示では、報道写真が伝えた戦場、街で写された出征の様子や軍隊生活を描いた絵画、綴られた日記、兵士が現地から家族に送った手紙、子供たちが戦時中に書いた絵や作文などを通し、戦時下を生きた人びとの姿を紹介するとともに、その心情に迫ろうとするものでした。展示構成は、(1) 戦争と報道、(2) 戦争を伝える、(3) 戦争の終わり、(4) 伝え続けていくために、でした。図録を刊行しています。

関連して、「戦時中の体験を聞く会」が2014年8月16日に開かれ、久保山栄典さんが「蟬が鳴かなかった8月ー長崎での被爆体験」と題して話しました。

Tel:0493-35-4111 Fax:0493-35-4112
<http://www.saitama-peaceMuseum.jp/>

入間市博物館 ALIT:埼玉

常設展資料特別公開「戦争と入間」が2014年7月23日～8月31日の会期により常設展示室2階「ものでみる暮らしコーナー」で開催されました。入間にあった軍事施設・陸軍航空士官学校・出征・空襲などに関連する資料など約50点が展示されました。

Tel:04-2934-7711
<http://www.alit.city.iruma.saitama.jp/>

蕨市立歴史民俗資料館:埼玉

第25回平和祈念展「代用品ーモノが語る戦時下の暮らし」が2014年7月26日～9月28日の会期により2階展示室で開催されました。戦中・戦後の物資が不足した時代に考案された代用品を中心に展示していました。

Tel:048-432-2477
<http://www.city.warabi.saitama.jp/hp/menu000000200/hpg000000120.htm>



東京大空襲・戦災資料センター:江東区

2014年夏の親子企画「みて!きいて!つたえよう!

東京大空襲」が2014年8月14日～17日に2階会議室で開催され、空襲体験者の話、紙芝居、追体験の語りなどがありました。秋の平和文化祭が11月1～3日に2階会議室で開催され、一人音楽劇「猫は生きている」、学生映像祭&シアタートーク、鈴木志郎康さんの詩をフィールドワークする、などがありました。被爆ピアノ修理記念コンサートが2014年12月4日に2階会議室で開催されました。

Tel:03-5857-5631 Fax:03-5683-3326
<http://www.tokyo-sensai.net/>



高麗博物館:東京・新宿区

展示:「ひたむきに生きた 朝鮮・韓国の女性たち」が2014年9月3日～11月30日の会期で開催されました。植民地支配のもとで抑圧された女性たちの生活と社会進出を紹介していました。

Tel:03-5272-3510 Fax:03-3207-0533
<http://www.40net.jp/~kourai/>

東京都公文書館:世田谷区

企画展示「子どもの見た戦争ー手紙が語る学童疎開」が2014年8月11日～9月12日の会期により2階閲覧室内の展示スペースで開催されました。2014年に、東京都公文書館には、学童疎開を体験された方が保存していた疎開地からの手紙や葉書、疎開中に描いた絵などが寄贈されました。本展では、当時の小学生が体験した疎開地の暮らしとはどのようなものであったのかを、これらの新収蔵資料と聞き取りを中心にして紹介していました。さらに疎開がおこなわれた背景、東京都の疎開に関する文書、防空政策などについても展示していました。解説書を作成しています。

Tel:03-3707-2601
<http://www.soumu.metro.tokyo.jp/01soumu/archives/>

国立公文書館:東京・千代田区

2014年度第2回企画展「『写真週報』ー広報誌にみる戦時の暮らし」が2014年7月26日～9月13日の会期により本館1階展示場で開催されました。1938年から45年にかけて、内閣情報部(のち情報局)が刊行したグラフ誌『写真週報』を、衣食など、人びとの生活に関わる記事に着目

して、紹介していました。

Tel : 03-3214-0621

<http://www.archives.go.jp/>

昭和のくらし博物館:東京・大田区

「小泉家に残る戦争」展が 2014 年 8 月 1 日～31 日の会期で開催されました。小泉家に残る戦争を物語る資料を見て、戦争がいかに恐ろしいものか考え、戦争反対の声をあげようという趣旨で開かれました。

Tel&Fax:03-3750-1808

<http://www.showanokurashi.com/>



日本女子大学成瀬記念館:東京・文京区

「戦時下の青春展」が 2014 年 10 月 28 日～12 月 20 日の会期で開催されました。成瀬記念館では、戦後 50 年にあたる 1995 年に、大学部及び付属高等女学校に在学していた方がたを対象に戦争と平和に関するアンケート調査を実施しました。学生たちが戦時下をどのように生きたかを伝える貴重な資料です。アンケートは、存分に学ぶことができなかつた無念さを映し出す一方で、彼女たちの青春が暗いだけのものではなかつたことを教えてくれます。本展示では寄せられたアンケートの内、大学部に在学していた方がたの回答を元に、当時の資料と併せて戦時下の学生たちの姿を描き出していました。戦時家庭経済博覧会、紀元 2600 年、防空訓練、大人紙芝居、修業年限の短縮、学徒出陣、学徒勤労働員、学校工場など、戦時体制が強化される中での学園のさまざまな様子を伝えています。解説資料を作成しています。

Tel.03-5981-3376

http://www.jwu.ac.jp/unv/facilities/naruse_memorial/index.html

慶応義塾福沢研究センター:東京・港区

「慶応義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト第 2 回展示「慶応義塾と戦争Ⅱー残されたモノ、ことば、人々展」が 2014 年 10 月 7 日～31 日の会期により、図書館展示室と慶応義塾大学アート・スペースで開催されました。慶応義塾図書館展示室では、1. 戦争の時代を伝える「モノ」、ある塾員の場合ー1、ある塾員の場合ー2、ある一家の場合、の構成で、プロジェクトの呼びかけに応

じて提供された資料を中心として、戦争を巡る多様な「実物」を展示していました。慶応義塾出身の戦没者として一般によく知られている小泉信吉、宅島徳光、上原良司とその一家の資料も、周辺の多様な実物資料とともに展示していました。多様な資料を記録し見つめ直すことで、初めて立体的に時代が浮かび上がってくることを伝えようとするものでした。アート・スペースでは、2. 交錯する「モノ」と体験、ある戦死を巡って、あるクラスを巡って、ある部活を巡って、ある特別攻撃隊を巡って、福沢諭吉を巡って、残されていた卒業証書、3. 記憶から歴史へー記録と継承の模索、の構成で、べつべつに寄贈されたり所在が確認された資料が、さまざまな交点を結ぶ例を展示していました。ある特定のクラス、部活等に注意して資料を見つめ直したときに、「モノ」たちはさまざまなストーリーを語り出していました。これまで単なる個人的な記憶や資料から、どのような努力によってこの時代が記録され歴史化されてきたのか、今後どのように、何を引き継ぐべきかについても、改めて考えていこうとしていました。展示図録を作成していました。

Tel:03-5427-1603 Fax:03-5427-1605

<http://project.fmc.keio.ac.jp/>



東京大学駒場博物館:目黒区

特別展「越境するヒロシマーロベルト・ユンクと原爆の記憶」が 2014 年 10 月 18 日～12 月 7 日の会期で開催されました。ロベルト・ユンクはドイツ生まれのユダヤ人ジャーナリストで、ヒロシマを世界に伝えることに半生を捧げました。若い頃、反ナチ抵抗運動に身を投じたユンクは、第 2 次世界大戦が終わるとアメリカに渡り、そこでおこなわれていた核実験の問題に向き合います。そしてヨーロッパに戻り、人間の未来を脅かす技術開発への盲信に警鐘を鳴らしながら、多くの市民とともに反核・平和運動を進めていきました。ユンクはその間、広島を何度も訪れ、被爆者と語り合いました。彼が著した「灰燼の光ー甦るヒロシマ」は、原爆の悲惨さだけでなく、廃墟から立ち上がる人びとの姿を伝える迫真のルポとして評判をとり、世界 14 か国語に翻訳されました。そこに出てくる被爆した少女、佐々木禎子の折鶴の物語は、オーストリアの児童文学作家カール・ブル

ックナーの手で『サダコは生きたい』となって世界中に広まりました。本展示では、ヒロシマから人類の未来への責任を問うたロベルト・ユンクの足跡を辿りながら、ヒロシマ・ナガサキの遺産をいかに引き継ぎ、世界にどのように発信していくかという問題を考えようとしていました。

Tel:03-5454-6139 Fax:03-5454-4929
http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/j/d_141018.html



早稲田大学大学史資料センター

展示会「十五年戦争と早稲田」が2014年10月1日～11月8日の会期により、早稲田キャンパス26号館・大隈記念タワー10階・125記念室で開催されました。15年戦争期（日中戦争、アジア太平洋戦争）から、1945年8月の敗戦を経た占領期までの早稲田大学の歴史を展示していました。とくに、戦時下の学生生活や勤労働員・学徒動員、さらには植民地出身学生と戦争などのテーマに焦点をあて、戦時下における学生の諸相、戦争と大学の関係をあらためて問うものでした。図録を作成しています。

Tel:042-451-1343 Fax:042-451-1347
<http://www.waseda.jp/archives/>

八王子市郷土資料館:東京

コーナー展「戦時下の生活ーぜいたくは敵だ」が2014年7月12日～8月31日の会期で開催されました。寄贈・館蔵資料の中から、国民精神総動員運動チラシ、肉なし日ポスター、突貫双六、家庭用品購入通帳、衣料切符、もんぺ、米つき瓶、着物の袖を切る呼びかけチラシ、ドングリ拾いのチラシ、カボチャの種の回収呼びかけチラシ、電気パン焼き器、タバコ巻き器、代用食販売看板、露店営業証明などを、戦時下の耐乏生活をテーマとして展示していました。

関連して、講座「八王子空襲と戦時下の生活」が8月15日・16日に開かれました。

Tel:042-622-8939 Fax:042-627-5919
<http://www.city.hachioji.tokyo.jp/shisetsu/28254/028261.html>

明治大学平和教育登戸研究所資料館:神奈川・川崎市

戦争遺跡保存全国ネットワーク主催の特別パネル展示「平和のための戦争遺跡の保存を求めて」が2014年7月16日～10月25日の会期で開催されました。第18回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県川崎大会が明治大学平和教育登戸研究所資料館で開催されたことにちなむもので戦争遺跡保存全国ネットワーク加盟の各地の団体による戦争遺跡の保存を紹介するものでした。

第5回企画展「紙と戦争ー登戸研究所と風船爆弾・偽札」が2014年11月19日～2015年3月21日の会期で開催されました。陸軍登戸研究所では、戦時中、紙を使った2種類の兵器を開発していました。一つは和紙を使った風船爆弾（ふ号兵器）、もう一つは偽札です。風船爆弾（爆弾・焼夷弾を吊るした直径10mの水素気球）は、1944年11月以降、約9300発が放たれ、1000発以上が目標の北米大陸に到達したとされています。この気球本体は、和紙をコンニャク糊で貼り合せたもので、全国の和紙産地と女子労働力を大動員して生産されました。2014年は風船爆弾放球70年を迎えることに加え、風船爆弾用気球紙開発協力を要請された埼玉県小川町で作られている「細川紙」がユネスコの無形文化遺産に登録され、注目が高まっています。また、中国経済の攪乱を目的に1939年に参謀本部によって命じられた中国蒋介石政権の紙幣（法幣）の偽造には、当時の最高水準の紙漉き・透かし・印刷技術が用いられました。1942年以降、大量生産された偽造紙幣は当時の額面で40億円にのぼったとされています。今回の企画展では、この紙を使った兵器に焦点をあて、当時の和紙・洋紙製造技術がどのようなもので、伝統的な和紙技術がどのように風船爆弾製造に利用されたのか、近代において発達した洋紙技術がどのように偽札製造に動員されたのかを、当時の貴重な現物展示をまじえて明らかにするものです。

Tel&Fax:044-934-7993
<http://www.meiji.ac.jp/noborito/index.html>

長岡戦災資料館:新潟

「長岡空襲殉難者遺影展、住宅焼失地図展」が2014年7月6日～8月31日の会期により、「長

岡空襲体験画アオーレ特別展「長岡戦災資料館十周年記念誌発行記念」が2014年7月12日～15日の会期により、それぞれ開催されました。

Tel:0258-36-3269 Fax:0258-36-3335

<http://www.city.nagaoka.niigata.jp/kurashi/sensai/siryokan.html>

松本市立博物館ほか:長野

松本まるごと博物館3館連携事業、第4回「戦争と平和展」が2014年8月2日～9月15日の会期で開催されました。松本市立博物館では「近代都市・松本―戦争と軍隊、その遺産」が開かれました。松本に1908年に歩兵第50連隊が設置されると、多くの軍需工場が誘致されました。都市形成や地域振興に戦争・軍隊がどう関わったかを、歩兵第50連隊関連資料や、航空機生産を中心とした軍需工場に関連する資料に加え、「ゼロ戦の生みの親」堀越二郎に関する資料も展示して、紹介していました。重要文化財 旧開智学校校舎では、「戦時下の学校―鍛錬となった遠足・修学旅行」を、松本市歴史の里では「刑務官が見た巣鴨プリズン」をそれぞれ開催しました。

Tel : 0263-32-0133 Fax:0263-32-8974

<http://www.city.matsumoto.nagano.jp/sisetu/marugotohaku/siritu/>

静岡平和資料センター:静岡市

企画展示「子どもたちの戦時下―毎日が“お国のため”に」が2014年6月13日～10月26日の会期で開催されました。70年前、日本は中国やアメリカ・イギリスと戦争をしていました。そのころの子どもたちはどのような暮らしをしていたのでしょうか。今回の展示では、実物資料やパネルで戦争中の子どもたちの暮らしを紹介していました。

企画展示「静岡大空襲からの復興―瓦礫から立ち上がる人々」が2014年11月14日～2015年3月29日の会期で開催されました。戦後、静岡市がどのように復興を遂げてきたかを、写真・パネルで示すものです。解説資料を作成しています。

Tel&Fax:054-271-9004

<http://homepage2.nifty.com/shizuoka-heiwa/>

焼津市歴史民俗資料館:静岡

被災60年企画展「第五福竜丸―2014年、平和への願い」が2014年5月30日～9月28日の会期で開催されました。被災から60年を経た第五福竜丸事件に係わる資料などを展示していました。

Tel:054-629-6847 Fax:054-629-6848

<http://www.city.yaizu.lg.jp/rekimin/index.html>



滋賀県平和祈念館:東近江市

第9回企画展示「子どもたちが見た戦争」が2014年10月4日～12月21日の会期で開催されました。今回の企画展示では、「少国民」「戦時の学校」「戦時の暮らし」「滋賀県の空襲」「集団学童疎開」「学徒勤労動員」の6つコーナーを設けて、戦争中子どもだった人たちの視点から当時の出来事を紹介していました。当時の子どもたちが、どのような体験をし、どんなことを考えていたのかを知ることで、世代を超えて平和について考えてみたいという開催趣旨でした。

Tel:0749-46-0300 Fax:0749-46-0350

<http://www.pref.shiga.lg.jp/heiwa/heiwaMuseum/>



浅井歴史民俗資料館:滋賀

企画展「第11回終戦記念―学童疎開」が2014年7月29日～8月31日の会期で開催されました。学童疎開の実態を、当時の手記や写真、遊具など3部門15件の資料でたどるものでした。終戦記念展では、大阪市北野国民学校の5～6年生児童約90人を受け入れた田根国民学校、同北野国民学校の3～4年生児童約100人を受け入れた小谷国民学校、大阪市滝川国民学校の児童を受け入れた旧伊香郡の村の児童の暮らしぶりを各種の書類、担任教師の日記、アルバム写真などで示していました。資料からは、寺院や公会堂を児童宿舎に、地元の仕出屋が給食を提供したり、村人が児童を自宅に招いて風呂や食事をもてなすなどのエピソード、疎開児童の引き上げでは音楽会や送別会が催されるなど、地域が児童を支えようとする姿が浮き彫りになっていました。一方、教師の日記からは児童が慣れない環境で次第に疲弊していく様子なども伝わりました。展示品の多くは県平和祈念

館の所蔵品でした。

Tel:0749-74-0101 Fax:0749-74-0101
http://www.city.nagahama.shiga.jp/section/azai_rekimin/



大津市歴史博物館:滋賀

第 64 回企画展「戦争と大津」ー激動の時代と子どもたちが 2014 年 7 月 19 日～8 月 31 日の会期により企画展示室 B で開催されました。本展では、困難な時代を生きた子どもたちに焦点を当て、対象とする時代も、戦時中から戦後、アメリカ軍を主体とした占領軍の大津進駐まで広げて紹介していました。特に、国民学校から新制の小中学校へと大きく変化した時代に、子どもや教師たちが体験した出来事を、時代背景を物語るさまざまな資料や写真、体験者の証言ビデオとともに紹介し、平和へのメッセージとしていました。図録と展示リストを刊行しています。

第 114 回ミニ企画展「戦争と大津」が 2014 年 7 月 15 日～8 月 31 日の会期により常設展示室の中で開催されました。本展では、物資不足に対応するための衣料切符や味噌・醤油の購入券、兵器製造のための金属類供出奨励ビラや宣伝用の紙芝居、灯火管制などの仕方を図解した防空演習時の配布物や召集令状などを展示し、きびしい銃後の市民生活を振り返るものでした。

Tel:L077-521-2100 Fax077-521-2666
<http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

栗東歴史民俗博物館:滋賀

特集展示「平和のいしずえ 2014ー“銃後の護りは台所から”の時代」が 2014 年 7 月 26 日～8 月 31 日の会期により第 2 展示室で開催されました。戦時下、特にアジア・太平洋戦争下では、戦局の悪化やそれに伴う兵員の大量動員により、農村の働き手が不足、国全体が食糧難に襲われました。銃後の暮らしでは、不足する食品の代わりとなるものが探され、またレシピもそうした代用品を用いた代用食が考案されるなど、さまざまな工夫が凝らされました。2014 年度の平和のいしずえ展では、こうした銃後での食べることを主なテーマにしています。その他、学童疎開、婦人会、兵士の関係資料も展示していました。

Tel:077-554-2733 Fax:077-554-2755
<http://www.city.ritto.shiga.jp/hakubutsukan/>

大山崎町歴史資料館:京都

「第 16 回平和のいしずえ展」が 2014 年 8 月 5 日～24 日の会期により開催されました。歴史資料館では、毎年夏に「平和のいしずえ」と題して戦前、戦中に使われたさまざまな生活用品などを展示し、平和と歴史を考える機会の提供につとめています。最近、府道（西国街道）の拡幅によって、町内の古い家屋の建替えが進んでいます。その際に確認された近代資料のなかから、博多人形「豊臣秀吉像」（陸軍特別大演習記念の箱書き有り）や政治家川崎末五郎の関係資料など、戦前、戦中に関係する資料も見つかっています。今回はそれらに焦点を当てた展示でした。

Tel:075-Tel:075-952-6288
<http://www.town.oyamazaki.kyoto.jp/>

亀岡市文化資料館:京都

ロビー展「戦争平和展」が 2014 年 8 月 1 日～31 日の会期で開催されました。国民服、軍靴などの遺品類のほか、灯火管制用の電球や当時の世相を示す世界地図、戦時色を示す産着などを展示していました。また、今年、学校で学ぶべき 10 代の若者たちが軍需工場などで働くことになった「学徒勤労働員」についても、亀岡地域の様子を中心に紹介していました。解説パンフレットを作成しています。ロビー展「戦争平和展」は 2009 年から毎年夏に開催しているものです。

Tel:0771-22-0599 Fax:0771-25-6128
<http://www.city.kameoka.kyoto.jp/kurashi/kyoiku/bunka/shiryokan/index.html>

南丹市立文化博物館:京都

「戦争と南丹市 暮らしを支えた代用品」が 2014 年 7 月 26 日～9 月 28 日の会期により開催されました。戦争が長引くと、資源の少ない日本では兵器を作るための金属類などが不足しました。当時の政府は、人びとに金属類の回収を呼びかけるとともに、生活用品にいたるまで金属の使用を制限しました。これを補うために作られたのが「代用品」です。代用品には陶製のアイロンや

ガスコンロ、フォークやナイフのほか、木製の戸車なども生産されました。この展示会では、苦心して作られた代用品約 100 点を中心に紹介していました。

Tel:0771-68-0081 Fax:0771-63-2983

<http://www.be.city.nantan.kyoto.jp/hakubutukan/>

南丹市日吉町郷土資料館:京都

「戦争と南丹市 銃後を守った女性たち」が 2014 年 7 月 26 日～9 月 28 日の会期で開催されました。男性がつぎつぎと戦地へ駆り出されるなか、働き手を失った地域や家を守るため奮闘した女性の活躍に焦点をあてていました。出征兵士の見送り・出迎えや慰問袋づくり、配給物資の割り振りなど、女性の活動は多岐にわたりました。千人針、国防婦人会タスキ、かっぽう着、防空頭巾など約 80 点を展示していました。

Tel&Fax:0771-72-1130

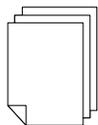
<http://www.be.city.nantan.kyoto.jp/hiyoshi-shiryokan/>

向日市文化資料館:京都

「くらしのなかの戦争展」が 2014 年 8 月 9 日～9 月 7 日の会期によりラウンジで開催されました。2014 年は、身近な地域のくらしにも影響を与えた戦争を、展示品をとおしてふりかえり、あらためて考えるきっかけにしようために、配給切符や代用品など、戦争が激化しさまざまな物資が不足してゆく中での、人びとのくらしがうかがえる資料を紹介していました。

Tel:075-931-1182 Fac:075-931-1121

<http://www.city.muko.kyoto.jp/shiryokan/top.html>



京都大学大学文書館:京都市

企画展「京大経済学部の創設と河上肇たち」が 2014 年 11 月 11 日～2015 年 1 月 18 日の会期により京都大学百周年時計台記念館 1 階歴史展示室で開催されました。今回の企画展では、1919 年に創設された京大経済学部を取り上げ、創設から転機を迎える 1920 年代末までの経済学部の歴史を、

当時の河上肇らの教官や学生たちにスポットライトをあてながら展示していました。京都学連事件、河上肇辞職事件も紹介していました。主要展示品は「経済学部独立に関する件」『評議会議事録 大正元年～大正十五年』『宣誓簿』河上肇筆「蓮の花」「河上教授辞職に関する件」『評議会議事録 自昭和 2 年 1 月 至昭和 5 年 5 月』です。

Tel:075-753-2651 Fax:075-753-2025

<http://kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/>

大阪国際平和センター (ピースおおさか):大阪市

ピースおおさかは、1991 年の開館以来、はじめてのリニューアルをするために、2014 年 9 月 1 日から休館しています。

ピースおおさかでは、毎年 8 月 15 日に終戦を祈念して、戦争犠牲者追悼式を開催しています。2014 年は、相愛高校の生徒による合唱と、相愛大学卒業生による弦楽四重奏のコンサートをおこないました。

Tel:06-6947-7208 Fax:06-6943-6080

<http://www.peace-osaka.or.jp/>

大阪人権博物館 (リバティおおさか):大阪市

第 69 回特別展「歴史のなかの憲法」が 2014 年 7 月 22 日～9 月 20 日の会期により特別展示室で開催されました。明治維新によって近代化・文明化へと踏み出した日本社会では、国会の開設による人びとの政治参加の実現を目標に掲げた自由民権運動がおこりました。その影響から各地でさまざまな結社が生まれ、盛んな言論・出版活動がおこなわれました。「自由」「民権」という言葉の響きは多くの人びとに新鮮なイメージを与えたからです。なかでも、民衆自身が参加して作成されたさまざまな憲法草案には、国家の未来像があますところなく盛り込まれていました。そこには、さまざまな権利と同時にナショナリズムの思想も含まれていました。戦前・戦後を通じて憲法にうたわれている権利の内容は、まさしく立憲政治が国内外で果たしてきた役割をありのまま映し出すものとして今日まで生き続けています。本展は、立憲政治の実現をかかげて展開された自由民権運動から戦後の日本憲法制度制定までの時期に歴史の節目を書き記された憲法草案に込められた思

想、そしてその実像について考えようとするものでした。展示構成は、Ⅰ憲法制定へ起こる議論－自由民権運動の諸相、Ⅱせめぎあう権利と義務－大日本帝国憲法の時代、Ⅲ人びとが取り結ぶ権利－結社をめぐる人物像、Ⅳ時代状況から読む憲法－日本国憲法の制定、でした。

関連して、シンポジウム「日本近代史からみた憲法の歴史的意義」が2014年9月6日に新井勝紘（専修大学）さんと石居人也（一橋大学）さんをシンポジストとして開かれました。

企画展1 開館30周年記念「収蔵品にみる人権の歴史」が2014年11月18日～3月19日の会期により特別展示室で開催されました。本展は、館がこれまで収集してきた歴史的・文化的資料のなかから選んだ資料を時代ごとに配列して構成しているものです。

Tel:06-6561-5891 Fax:06-6561-5995
<http://www.liberty.or.jp/>



平和と人権資料館（フェニックス・ミュージアム）：大阪

2014年度特別展「地球の上に生きる DAYS JAPAN フォトジャーナリズム写真展」が2014年8月20日～28日の会期により堺市教育文化センター（ソフィア・堺）ギャラリーで開催されました。人間と地球が抱える問題を鋭く写し出す2014年・2013年のDAYS国際フォトジャーナリズム大賞受賞作品約40点を展示し、戦争・災害・環境汚染など、地球の真実の姿を伝えていました。これら世界のフォトジャーナリストたちの作品を通じて、人間と地球が抱える問題、世界が変わり続ける中で繰り返される悲劇について見つめなおし、「いのちと平和の大切さ」「環境を守ることの大切さ」そして、今、私たちができることについて考えるという趣旨で開催されたものです。この写真展では、内戦が深刻化するシリアをはじめ世界各地で続く紛争、難民と飢餓、貧困問題、そして東日本大震災と原発事故などをテーマとした作品が並んでいました。そこに写し出されるのは、日頃見聞きするニュースからは見えてこない、世界の大きな問題の中に置かれた一人ひとりの人間の姿でした。

企画展示「アウシュヴィッツから考える平和」が2014年10月1日～12月28日の会期により企

画展示コーナーで開催されました。先の世界大戦でアウシュヴィッツにおいて当時のドイツ側とソ連軍が撮影した写真を通じてその実相に触れ、戦争の悲惨さ、平和の尊さ、人権を守ることの大切さを考えるために開かれたものでした。

Tel:072-270-8150 Fax:072-270-8159

<http://www.city.sakai.lg.jp/shisei/jinken/jinken/heiwa-jinkenshiryokan/>



吹田市平和祈念資料館：大阪

企画展「記憶のなかの神戸－私の育ったまちと戦争」豊田和子原画展が2014年7月29日～8月24日の会期で開催されました。16歳のときに神戸大空襲を体験された神戸市在住の仏画家の豊田和子さんが、戦前・戦時下の神戸での生活や空襲体験を描いた作品を展示していました。空襲の恐ろしさを描いたものや、戦時中の人びとの日常生活を描いた作品などが、やさしいタッチで描かれています。大人だけでなく、未来を担う子どもたちにも、平和の大切さについて考えるきっかけとなる展示でした。

関連して、特別イベント：豊田和子さんのお話をきく会が2014年8月9日に千里ニュータウンプラザ8階多目的ルームで開かれ、原作者の豊田さんが過ごした戦前・戦時下の神戸での生活のようすを話しました。

Tel:06-6876-7793 Fax:06-6873-7796

http://www.city.suita.osaka.jp/home/soshiki/div-jinken/jinken/_56228.html



箕面市立郷土資料館：大阪

企画展示「戦時生活資料展－忘れない、戦争の記憶と平和への願い」が2014年8月1日～9月8日の会期で開催されました。この資料展では、限られた食料や衣服などを平等に配布するために発行した配給券や戦時中の教科書・新聞、防空頭巾、「防火砂弾」や「布製バケツ」など空襲による火災に備えた防火用品、「米つき」、出征前の兵士たちが滝安寺に武運祈願に訪れた際に記帳した台帳「祈武運長久」など、戦時中の庶民の暮らしが伝わるような43品目の資料を展示していました。大戦中、人びとの生活は疲弊し、何ごとにも必死に生き抜いた生活でしたがそれの一

部にスポットをあて、写真や実際に使用していたものを家族・友人などたくさんの方がたの思い出や気持ち、証言をとおして知っていただくことで、戦いのない時代が少しでも長く続くことを願いながら、この企画展が開催されました。同資料館で学芸員実習をした仏教大学と甲南大学の学生2名が資料館にある数多くの資料の中から、展示品の選定、レイアウトなどをしました。

Tel:072-723-2235 Fax:072-724-9694
<http://www.city.minoh.lg.jp/kyoudo/kikakutenji.html>



姫路市平和資料館・兵庫

秋季企画展「戦争で傷ついた子どもたちの心と体」が2014年10月4日～12月21日の会期により2階多目的展示室で開催されました。戦争中、衣食住の著しい欠乏の中、子どもたちの受けた傷は、肉体的、精神的に計り知れないものがありました。戦中から戦後の暮らしを通して、戦争に巻き込まれた子どもたちのさまざまな苦難を紹介していました。現物資料は、立命館大学国際平和ミュージアムから紙芝居・双六などや衣服、教科書や写真などを数多く借りて展示していました。実物資料の展示資料点数は130種類、およそ300点でした。映像コーナーでは、当時、戦争協力に子どもたちを向かせるための国策紙芝居を、このたび、編集し映像化したものを上映していました。

展示項目は以下のとおりです。

1 空襲と疎開

本土空襲を避け、学童40万人以上が一斉疎開
姫路への空襲で消失した学校

2 配給と食糧

まず綿製品が市場から消え、続いて食料品も配給制に

供給量不足のため、闇売りが横行

主な切符と配給制度

足りない食糧は工夫で補う、「決戦食」

3 出征と帰還

英霊として帰還した大人たちを迎える忠魂碑

次々と戦場に送られていった少年兵たち

陸軍・海軍の少年兵制度

4 紙芝居

子どもに人気の紙芝居も、国策宣伝のメディアに

5 学校と学校生活

戦前・戦中の学制の変遷

太平洋戦争初期の学制

太平洋戦争末期の学制

畑仕事や軍需工場で汗を流した、中学生の勤労奉仕

裸足で通学、半数に満たなかった授業日数

手で書き写した教科書

6 おもちゃ

おもちゃにも戦争色が。やがて物資不足で生産量が減少

7 健康

平均体重の減少に現れた栄養不足

関連して、2014年11月3日に姫路空襲体験談を聞く会が開かれ、黒田権大さんが話されました。

Tel:079-291-2525 Fax:079-291-2526

<http://www.city.himeji.lg.jp/heiwasiryoo/>

尼崎市文化財収蔵庫・兵庫

企画展「夏季学習展 こどもたちの戦中戦後」が2014年7月19日～8月31日の会期で開催されました。太平洋戦争がこどものくらしや教育、遊びなどにどのような影響を与えたのか、また戦後、それらがどのように変わったのかを考える展示会でした。主な展示構成と展示資料は以下の通りです。

1 我ら少国民 雑誌「週刊少国民」、少国民豆手帳

2 国民学校 国民学校初等科教科書、国民学校芸能科レコード

3 銃後のくらし 豆紙芝居ドウブツトナリグミ、コドモノオカシ回数購入票

4 兵役の義務 「まづ健康まづ兵役」ポスター、徴兵保険案内

5 勤労働員 賞詞、反省録（勤労働員日記）

6 学童疎開 疎開先の様子を描いた絵、雑誌「週報」

7 空襲への備え 防空必携我等の防空紙芝居、尼崎空襲を伝える新聞

8 戦争が終わって 副読本「新しい憲法のはなし」、占領時代の国産玩具

9 おもちゃで比べる戦中戦後 ブリキのおもちゃ、塗り絵、面子シート、抜取組立
企画展ワークシートを作成していました。

Tel&Fax:06-6489-9801

http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/dbps_data/_material/_files/000/000/030/824/2606shiryu4.pdf



奈良県立図書館:奈良市

戦争体験文庫企画展示「爆撃の中の逃避行 須藤ヨシエ氏の「サイパン島戦争体験記」を読む 2」が2014年6月28日～9月28日の会期で開催されました。須藤ヨシエさんによる「サイパン島戦争体験記」の2回目です。サイパンが激しい空襲を受け、急きょ島北方のバナデルから戻った夫と、社宅で一晩を過ごします。「ここには危ない」という夫の予知夢により、ふたりは、バナデルへ避難することにします。周りの社宅は焼け落ち、米軍の爆撃や艦砲射撃がなお続く中、チャランカノアから自転車で15キロ北のバナデルへ向かいます。

戦争体験文庫企画展示「壕からかいた日本兵と米兵たち 須藤ヨシエ氏の「サイパン島戦争体験記」を読む 3」が2014年10月1日～12月27日の会期で開催されました。須藤ヨシエさんによる「サイパン島戦争体験記」の3回目です。島北部の壕に避難した須藤さんたち。日本軍の炊事班が壕の横に移ってきて、彼らと協力し合います。しかし、ほどなく玉砕を期しての「総攻撃」に部隊は去り、残された傷病兵も艦砲射撃で全滅します。替わって現れたのは、上陸したアメリカ兵たちでした。須藤さんの目から見たサイパン戦の模様を描いていました。

Tel: 0742-34-2111 Fax: 0742-34-2777

<http://www.library.pref.nara.jp/sentai/kikaku.html>



奈良県立民俗博物館:大和郡山市

コーナー展「戦時下の暮らし」が2014年8月2日～9月7日の会期で開催されました。館が所蔵する戦時体制下の生活資料を中心とした展示でした。

関連して展示初日の8月2日には、玄関ロビーにて「語り継ごう、戦争」が開催されました。ました。「お母ちゃんお母ちゃんむかえにきて」「おとなになれなかった弟たちに・・・」「北原

百次郎氏の手紙」「序」「ヒロシマの空」「灯籠ながし」「つばき地蔵」など、戦争や学童疎開についての朗読会でした。

Tel: 0743-53-3171 Fax:0743-53-3173

<http://www.pref.nara.jp/1508.htm>

福山市人権平和資料館:広島

企画展「ノーモア！ヒロシマ・ナカサキ「原爆と人間」」が2014年8月1日～31日の会期で開催されました。広島・長崎に投下された原子爆弾は、一瞬にして街を破壊しつくし、2つの都市で20万人以上もの生命を奪いました。生き残った人は、現在でも放射能の障がい苦しんでいます。「核兵器による被害者を再びつくりたくない」との願いをこめて制作された写真集「原爆と人間」（日本原水爆被害者団体協議会）を展示して、核兵器の廃絶と平和の大切さを訴えるものでした。

「収蔵庫展」が2014年9月13日～11月30日の会期で開催されました。同和問題をはじめとする人権に関わる運動の記録や資料、戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝える資料で、写真・書籍・新聞・雑誌・映像・手紙・絵画など、とくに召集令状・連隊史・戦地からの手紙・遺書・遺品などを展示していました。福山市人権平和資料館が8月30日に開館20周年を迎えた記念の展示会でした。

「ふくやまピース・ナビ養成講座」が以下のように開催されました。

第1回 7月29日 テーマ「人権と平和を求めて一母と子の八月八日」講師 田辺準一郎さん

●「海軍航空隊」の兵士が出征の際、わが家の上空を旋回して行きました。戦争で失ったものは、命だけでしょうか。小さな子どもが、『どうして戦争をするの』と問いかけます。あなたはへと答えますか。」

第2回 8月5日 テーマ「福山空襲と戦時下の暮らし」講師 北村剛志さん

第3回 8月12日 テーマ「福山空襲（米軍作戦任務報告書より）」講師 北村剛志さん

●「外国との緊張感をさんざん煽っておいて、戦争ができる国にしようとしている。平和を守るためには何よりも対話が大事です。」

第4回 8月19日 テーマ「広島原爆『父子のわかれ』」講師 廣中正樹さん

●「被爆した父の背中から、5歳の小さな手でガラスの破片を抜こうとしました。もう2度と私のような思いを誰にもさせたくありません。平和な国をつくっていきましょう。」

Tel:084-924-6789 Fax:084-24-6850

<http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/jinken-heiwashiryokan/>



太翔館（豊北歴史民俗資料館）：山口・下関市

企画展「軍事郵便展－親子の絆」が2014年7月19日～8月31日の会期で開催されました。第2次世界大戦時に、戦地や国内で郵送された書簡や手記などをとおして、家族、国、平和について問いかける展示会でした。下関空襲・終戦実行委員会が協力していました。

Tel&Fax:083-782-1651

<http://h-rekimin.jp/>



多度津町立資料館：香川

2014年夏期企画展「戦争資料展」が2014年8月1日～31日の会期で開催されました。日露戦争から15年戦争までの、当時を偲ばせる資料を多数展示していました。

関連して、石井雍大（香川県親善人形の会、香川県歴史教育者協議会）さんが「青い目の人形－人形たちの声が聞こえますか」と題して、2014年8月2日にロビーで講話をしました。1927年の人形交流、15年戦争と暮らし、アジア・太平洋戦争中の人形たちなどについて話されました。

Tel&Fax:0877-33-3343

<http://tkamada.web.fc2.com/shiryokan/kikaku/2014/201408senso/201408sensoposter.htm>

飯塚市歴史資料館：福岡

企画展「戦争とくらし展」が2014年7月31日～8月26日の会期で開催されました。平和教育の一環として戦時資料を展示して、筑豊における戦時下の生活や教育及び戦地へ出征した人びとについて紹介し、戦争の悲惨さと平和の大切さを改めて考える展示会でした。

Tel&Fax:0948-25-293

<http://www.city.iizukalg.jp/rekishi/index.htm>

大牟田市立 三池カルタ・歴史資料館：福岡

「平和展 2014 カルタが伝える戦争と平和」が2014年7月1日～9月21日の会期で開催されました。2014年は、世界を巻き込んだ大きな戦争のひとつである「第1次世界大戦」から100年の節目にあたります。その20年前に「日清戦争」、10年前には「日露戦争」と、日本が関係する戦争が起きました。昭和に入り日本は、「第2次世界大戦」に参戦し、長い戦いで多くの犠牲をはらいます。1945年にポツダム宣言を受け入れ降伏し、新しい憲法のもとで、民主主義の平和な国家に向けて再出発しました。今回の企画展では、子どもの遊び道具である「カルタ」が、軍国主義や戦争の影響をどのように受け、変わっていったのかを紹介していました。当時の空気を感ずることができる「カルタ」に触れることで、あらためて『戦争』と『平和』について考えるために開かれました。

Tel&Fax:0944-53-8780

<http://karuta-rekishi.com/exhibition>

久留米市立草野歴史資料館：福岡

企画展「昭和の記憶 久留米・福岡 まんが日記が語る戦時下の暮らし」が2014年7月5日～8月31日の会期で開催されました。「まんが日記」は、1997年に86歳で亡くなった石橋病院（後の聖クララ病院）の豊増忠雄医師が、久留米・福岡を舞台に日々の暮らしをコミカルなタッチで描いたもので、色鉛筆を使って郵便はがきに記録した作品には戦中・戦後の様子がリアルに綴られています。資料館が2013年に計122点を確認し、1945～46年の久留米市や福岡市の様子、戦後のアメリカ兵の活動などを描いた作品を写真で複写し、A3判に引き伸ばしました。「ロックヒード」（ロッキード）と題して空襲を描いた作品では「防空壕に飛び込むヒマなく、大和魂を潰して押し入れに押し合ひあふ」。女性たちの防空壕づくりは「ワタシノビタワ」のタイトルで「オシッコして休んでもやかましいのヨ。そして、もっと力を出せ、怠ケトルって、女にはとてもムリよ」などと本音が書かれています。戦後の一変した生活と生まれたばかりの民主主義に戸惑いながらも、廃墟の町から復興していく会社や、進駐したアメリカ兵の様子、労働組合の誕生、総選挙なども描かれています。展示された65点にはユーモアとと

もに、あらがいがたい戦時体制への批判もうかがえるものでした。今回の企画展では、初公開の「まんが日記」のほか、風刺画「博多にわか」、被災写真、水天宮や高良大社で戦勝祈願をしている写真や、国民服・献立表といった当時の暮らしぶりがうかがえる生活資料など約160点も展示していました。戦時下の人びとの暮らしを偲び、あらためて平和の尊さを考えるきっかけとなる企画展でした。

Tel:0942-47-4410 Fax:0942-47-4410
<http://www.kurume-hotomeki.jp/jp/event/?mode=detail&isSpot=1&id=400000000368>

長崎原爆資料館:長崎

2014年度第1回企画展「原爆資料館収蔵資料展」が2014年7月23日～9月28日の会期により、地下2階の企画展示室で開催されました。新規寄贈品(2013年7月から2014年6月までに寄贈された資料)と、アメリカ国立公文書館所蔵資料展Iとして、2013年度アメリカ国立公文書館で収集した被爆写真のうち、ポール・ヘンショー博士が撮影した写真26枚とを展示していました。

Tel:095-844-1231 Fax:095-846-5170
<http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/peace/>

国立長崎原爆死没者追悼平和記念館:長崎市

第3回被爆体験記企画展「家族を憶う」が2014年7月1日～12月22日の会期により地下2階の遺影・手記閲覧室で開催されました。原爆により多くの人びとが肉親とのつらい別れを体験しました。今回の企画展では「家族を憶う」と題し、原爆で失った家族への憶いを綴った体験記を、1995年度に厚労省が収集した体験記集と祈念館に寄贈された体験記の中から選び展示していました。

Tel:095-814-0055 Fax:095-814-0056
<http://www.peace-nagasaki.go.jp/>



長崎市歴史民俗資料館:長崎

企画展「戦時中の暮らし展」が2014年6月19日～8月24日の会期で開催されました。展示品は、貨幣・紙幣・切手・軍事郵便・教科書・紙芝居・

防火演習写真・防砂袋・防空頭巾・もんぺ・精霊流し図など約150点です。

Tel&Fax:095-847-9245

<http://www.city.nagasaki.lg.jp/kanko/820000/828000/p009251.html>



ナガサキピースミュージアム:長崎市

「紙芝居「嘉代子桜」イラストレーター岡本典子原画展」が2014年7月8日～8月3日の会期で、国松実写真展「長崎原爆ドーム・旧浦上天主堂を撮る」が2014年8月5日～31日の会期で、「馬たちの戦争一軍馬慰霊碑に見る“戦争と平和”」が2014年12月2日～2015年1月25日の会期で、それぞれ開かれました。

Tel:095-818-4247
<http://www.nagasakips.com/>



薩摩川内歴史資料館:鹿児島

終戦記念展示コーナー「薩摩川内と空襲」が2014年8月5日～9月7日の会期により2階通路で開催されました。1945年7月から8月にかけて、川内駅や市街地をはじめ、市内各所で空襲の被害を受けました。それを絵などによって伝える展示会でした。

Tel:0996-20-2344 Fax:0996-20-2848
<http://rekishi.satsumasendai.jp/>



沖縄県平和祈念資料館:糸満市

第2回子ども・プロセス企画展「チャレンジ!夏休み自由研究」が2014年7月19日～8月31日の会期により1階ひろば・ゆいまーるで開催されました。沖縄戦や戦時中の人びとの暮らしなど自由研究のテーマ選びのヒントになる資料を紹介していました。

第3回子ども・プロセス企画展「沖縄戦への道70年前、その時、何が...2-10・10空襲、そして県民総動員へ」が2014年9月19日～11月20日の会期により1階ひろば・ゆいまーるで開催されました。2014年は、沖縄守備軍の配備やサイパンの戦い、学童疎開、対馬丸遭難、10・10空襲など

沖縄戦につながるさまざまな出来事が 70 周年を迎えます。この機会に、戦争や平和についてより深く考える機会とするために開かれたものです。

第 15 回特別企画展「南洋の群星が見た理想郷と戦」が 2014 年 10 月 9 日～12 月 11 日の会期により 1 階企画展示室で開催されました。今から 70 年前、旧南洋群島ではサイパンやテニアンを中心に日本アメリカ両軍の激しい戦闘があり、移民として渡っていた多くの沖縄県出身者が地上戦に巻き込まれました。旧南洋群島への移民、地上戦、そして沖縄への引揚げ、今も続く慰霊の想いを展示していました。

Tel:098-997-3844 Fax:098-997-3947

<http://www.peaceMuseum.prefokinawa.jp/>

海外の平和博物館ニュース

開館した「奉天捕虜収容所博物館」と建設中の「遼源高級捕虜収容所博物館」
(西里扶甬子 ジャーナリスト・POW研究会員)

奉天とは現在は瀋陽と呼ばれている旧満州国の大都市である。1942年晩秋に開所したこの捕虜収容所に当初は米軍兵が1400人余りと、豪軍兵16人NZ兵1人を含む100人の英軍兵が収容されたが、1945年4月から5月にかけてフィリピンや日本本土の捕虜収容所から到着した約480人の中に相当数の蘭印軍捕虜が含まれていた。真珠湾急襲と同時にマレー半島、香港、フィリピン、そして蘭印と進攻した日本軍は14万人もの連合軍将兵を捕虜とした。「生きて虜囚の辱めを受けず」と戦陣訓を叩き込まれた日本軍は、降伏した捕虜たちを侮蔑し、虐待した。誰もが共通して語るのはいざ知らず死者が出るほどに、貨車に詰め込むとか、バケツ数個を排泄に使うというような状態で輸送船の真っ暗な船底に何十日も押し込められた地獄船の話である。奉天捕虜収容所の米軍兵は全員フィリピンで降伏し、「バターン死の行進」の体験者も相当数居た。フィリピンの収容所の待遇も劣悪で、日常的に看守による暴力に痛めつけられていた。食料は粗末で慢性的飢餓状態に置かれていた。英軍兵はシンガポールの陥落時に捕虜となった訳で、いずれも熱帯から夏服のま

ま極寒の地へ送られ、最初の冬には200人以上が命を落とした。2003年頃から、在米華僑グループと瀋陽市、遼寧省、北京政府の連携で、瀋陽市内の収容所跡地に捕虜収容所博物館を作る準備が始まった。工事が完成して開館に至る10年ほどの間に、捕虜だった米兵やその家族、捕虜問題の研究者などを招待して、シンポジウムを開催したり、展示用のさまざまな品物、遺品などを収集した。共に日本軍の虐待を耐え忍んだという連帯感から、中米の友好と絆の象徴ともなっている。瀋陽市内の本所は満州工作機械の工場に併設して建てられ、捕虜たちは主にこの工場で働かされていた。博物館は本所跡に作られ、宿舍の一棟をそのまま残し、内部は収容所当時を再現している。日本国内にも130ヶ所に及ぶ連合軍捕虜収容所があったが、捕虜虐待の容疑で戦犯となり、死刑者も出た戦後の成り行きの中で「忘れない過去」として、その面影を残しているところはほんの数ヶ所に過ぎない。1945年には瀋陽から240キロ離れた吉林省西安（現在の遼源市）に高級将校捕虜用の収容所が作られ、在比米軍やシンガポール英軍、蘭印軍などの司令官クラスの捕虜たちが台湾から移送されてきた。現在ここにも博物館が建設中で、瀋陽大学の奉天捕虜収容所研究室主任の楊競先生の案内で訪問し、遼源市文化広電新聞出版局局長を始め担当者たちから歓迎を受けた。

第 8 回国際平和博物館会議

9月19～22日、韓国のノグンリ平和祈念館において、第8回国際平和博物館会議が開催されました。35か国200人以上の人びとが集い、交流をすることができました。

安斎育郎先生が募金を集め、日本人参加者の資料集（会議プログラム、予稿集、関連資料）と参加者報告書が出版されました。また通訳を雇い、ボランティアの方の協力もあって、有意義な国際会議となりました。

国際会議の主な参加者の発言要旨を紹介します。

基調報告要旨

戦争を予防し、記憶・歴史的真相・和解を促進する上で、平和のための博物館が果たす役割について

平和のための博物館国際ネットワーク代表
ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン
Peter van den Dungen

国際平和博物館会議がノグンリ平和記念館で開催され、ノグンリ国際平和財団に心よりお礼申し上げます。また昨年INMPが平和賞を受賞しましたが、このことに対して有難く思っています。この3年間国際会議開催のために大変な努力をされたことに対して、代表の鄭求燾博士、そして組織者の金惠淵さんにお礼を申し上げます。

前回の国際会議はバルセロナ国際平和研究センターによって開催され、「戦争・暴力の文化から平和・非暴力の文化への転換における平和博物館の役割」というテーマでした。歴史的なモンジュイック城は戦争と暴力のある場所でしたが、国防省からバルセロナ市に管轄が移り、平和の砦としてのお城になりました。1975年フランコ政権まで35年間スペインの内戦があり、民主主義や人権が抑圧されていました。

ノグンリ大虐殺は、朝鮮戦争の間起こり、その後軍事政権が続き、韓国では1980年代にようやく民主主義が生まれてきました。冷戦の終わりとなったこの時期に初めて、ノグンリ事件の真実を語る事が可能になりました。バルセロナと同様にここも暴力や苦悩に満ちた場所が、平和のメッセージを発する地となりました。

ノグンリの物語やこの記念館の建設は、鄭求燾博士と彼の父親である鄭殷溶氏の大変な努力によるものです。鄭殷溶氏が先月亡くなられ、心よりお悔やみ申し上げます。ノグンリ虐殺事件では真実が明らかにされ、またアメリカ大統領によって後悔の言葉が発せられ、韓国政府のさまざまな援助を獲得してノグンリ平和公園の建設が実現し、鄭殷溶氏は満足されたことと思います。彼の『君は私たちの痛みがわかるか?』という小説で、戦争の犠牲者の苦しみを伝えました。今年は第一次世界大戦が始まって百年目に当たります。1924年ドイツの反戦家のエルンスト・フリードリッヒは『戦争に反対する戦争!』という本を出版し(日本では1988年出版)、1925年に反戦博物館を創設しました。しかしナチスに愛国的ではないと非難され破壊されてしまいました。その本が今年イギリスで再版されました。

フリードリッヒの反戦博物館の支持者の一人

として、芸術家のケーテ・コルヴィッツ(Kaethe Kollwitz)がいます。彼女は戦争の犠牲者の痛みを芸術作品で表現しました。1914年に二男のペーターを失い、1932年にはベルギーのフランダースのドイツ軍墓地に息子の戦死を悲しむ両親の彫像が置かれました。彼女は第二次世界大戦で医師の夫と孫息子を失いました。沖縄の佐喜真美術館には彼女の作品が最も多く集められています。ノグンリ記念館でも彼女の作品を展示すべきでしょう。彼女の作品は悲劇的な出来事を表現し、鄭殷溶氏の小説のメッセージと結びつくからです。

今日でも戦争で無実の市民、特に女性や子ども達が犠牲になっています。私たちは平和のための博物館を通して平和教育を推進し、戦争の予防と廃止のために努力する必要があります。

この会議では、戦争を予防し、記憶・歴史的真実・和解を促進する上で、平和のための博物館が果たす役割について話し合うのですが、忘れてはならないことがあります。それは戦争に反対した個人や団体、反戦運動、平和運動に関わった人びとのことです。歴史の教科書や博物館にはこれらのことは書かれませんが、重要なことです。たとえばポーランド系ロシア人の実業家で平和研究の先駆者であったジャン・ブロッホ(Jan Bloch :1836-1902)は、1914年第一次世界大戦が始まる約20年前に戦争の性質と結果を正確に予言しました。人びとに警告し教育しようと1902年にスイスのスサーン市に世界で最初の国際戦争・平和博物館を創設しました。

平和のための博物館ではノーベル平和賞受賞者やガンジーなどの展示をして、より良い世界は可能であると訪問者を励まし、自分は何ができるのかを考える場を提供することができる所です。また国際平和の実現のためには国際法や国連の強化が必要ですが、平和のための博物館ではそれらに関する展示やさまざまは取り組みを通して人びとの関心を高めることができます。例えばオランダのハーグの平和宮では訪問者センターがあり、ここでは平和宮にある国際司法裁判所や常設仲裁裁判所について情報を提供しています。

さまざまな国から多くの参加者があり非常に嬉しく思いますし、再度主催者のノグンリ国際平和財団にお礼を申し上げます。この会議は、お互いに学びあい、共にさまざまな経験をして私たちの重要な平和の活動をお互いに励まし支えあうこと

ができる良い機会です。どうもありがとうございました。

ビデオメッセージ 2

ビデオメッセージ 1.

元コスタリカ大統領、ノーベル平和賞受賞者
オスカー・アリアス・サンチェス
Óscar Rafael de Jesús Arias Sánchez

私はコスタリカ大統領を2期務めました。海外で博物館を訪問するのが楽しみでした。博物館で私たちは本物を見ることができ、そこは大学と同じくらい教育する力があります。また講演を聴いて感動するのと同じくらい影響力があります。そのために私たちの考え、行動の仕方、未来のあり方に影響を与えることができるのです。コスタリカのサンノゼに平和のための博物館がありますが、この博物館の計画については友人のマニエル・アラヤ・インセラさんが会議で報告します。

皆さんのそれぞれの博物館での活動は非常に重要ですが、韓国で来て共に活動することも重要です。それは力を合わせることによって、さまざまな問題に取り組むことができるからです。博物館では平和の種が毎日何百万人もの心に蒔かれています。世界ではどうでしょうか？アリアス平和・人権財団では、国際武器貿易禁止条約を1997年に提唱し、15年以上国連で他国に働きかけ、2014年に国連で承認されました。現在50か国の批准を待っているところです。正直に申しまして、国際法になるとは考えていませんでした。しかし小さな平和の種は本当に木になることができます。平和のために私たちは世界を変革することが可能なのです。

私はノグレンリへ行くことができませんが、現地へ行ってこそ歴史の重みを感じることができ、また世界の変革をする必要性を感じることができるのです。私たちは過去の犠牲者の声に耳を傾ける必要があります。また私たちの世代は、どんな展示物を次世代に残すことができるのかを自問する必要があります。戦争やテロで失ったものの証拠でしょうか？それとも変革や意見の合意、思いやりについてでしょうか。皆さんはもうその答えをご存知ですので、ここに集まっていられませんか。どうもありがとうございました。

台湾 二二八基金會執行長兼二二八國家紀念館
館長廖繼斌

台湾の国立228記念博物館を代表してご挨拶します。この博物館は、1947年に台湾の台北市で発生した228事件の教訓を学び、将来二度と同じような悲劇が起こらないようにするために設立されました。1947年2月27日、台北市で闇タバコを販売していた女性に対し、取締の役人が暴行を加える事件が起きました。これが発端となって、翌2月28日には人びとによる市庁舎への抗議デモが行われました。しかし憲兵隊が彼らに発砲し、抗争はたちまち台湾全土に広がることとなりました。これは台湾人と在台中中国人との大規模な抗争でした。国民党政府は大陸から援軍を派遣し、武力によって台湾人を徹底的に鎮圧しました。1987年戒厳令が終了し、犠牲者は謝罪と補償を政府に求めました。1995年には228記念財団が設立されました。その後2月28日は国民の休日と決められ、国立228記念博物館が2011年に開設されました。博物館では平和教育、人権教育を推進することができ、社会を変革することができます。国際交流を通して、相互理解を深めましょう。

戦争、残虐行為、ニュース報道と「平和のための博物館」

チャールズ・ジャンリー Charles J. Janley

世界のニュース報道機関は、歴史的に第一次世界大戦、第二次世界大戦、ベトナム戦争などの戦争の真の恐ろしさを伝えていません。1950-53年の朝鮮戦争でもそのような例はたくさんあります。平和のための博物館では、そのような報道機関がきちんと報道するようにいっしょに活動をすべきです。朝鮮戦争の際ナクトング川の橋の破壊で何百人もの避難民が殺されましたが、それは報道されませんでした。その時アメリカの大手の報道機関のレポーターがいたにもかかわらず、避難民の死亡について報道されなかったのです。1950年の他の例として、韓国政権が何千人もの政治犯を処刑したにもかかわらず、その大虐殺について北朝鮮軍と旅をしていたイギリスの共産主義者であったジャーナリストしか報道しませんでした。彼の真実の報道は、アメリカのお役人によって偽造で

あると非難されて簡単に片付けられ、機会が生じてもアメリカの報道陣によって報道されることはありませんでした。朝鮮戦争に関する真実の報道への抵抗は最近まで続けられ、ノグンリにおけるアメリカ軍の朝鮮人避難民大虐殺に関して、1998年米国連合通信社のAPによる事実確認の際、特にそうでした。APの指導者はその物語を報道させないようにしたので、その報道は一年間遅れてしまいました。1999年に報道されるとAPの報道者は、米軍やノグンリ事件の否定者によって手紙やインターネットを通して攻撃されました。ノグンリ記念平和公園や博物館は、戦争の恐ろしさの真実を守り、未来のジャーナリストの情報源としての役割を果たすことでしょう。他の平和のための博物館も、ジャーナリストが戦争についてもっと厳しく見識のある報道をするように、ジャーナリストに情報を与え励ますやり方をするべきでしょう。ちょうどアメリカのホロコースト記念館がAPと協働して、ヨーロッパのホロコーストの真実をより明らかにしたようにです。

パネルディスカッション

1. グローバル時代における平和ミュージアムの教育的使命

パネリスト

ロイ・タマシロ ウェブスター大学、アメリカ
山根 和代 立命館大学国際平和ミュージアム、日本
エリック・ソマーズ NIOD戦争・ホロコースト・大虐殺研究所、オランダ
ジーニー・ラム ハワイ大学、アメリカ

平和ミュージアムは、大多数の他のどんな機関より道徳的使命を持っている。平和ミュージアムは、未来の戦争を防ぐ事、また平和文化をいかに作り出すかを人びとに教える事を目的としている。また、優先すべき価値、また道徳的義務として平和を意識することを熱心に訴えている。このパネルディスカッションでは、平和ミュージアムが明示的、暗示的に、どのようにこの教育的使命を取り上げるか説明し、また道徳教育がどのように個人やコミュニティーに影響を与えるか検証する。

ロイ・タマシロは近現代の平和ミュージアムの変化について歴史的、地理的、そして政治思想的な観点から検証する。現代の平和ミュージアムはす

で1世紀以上存在はしているが、その平和の定義はさまざまであり、それゆえに 平和の教育と取り組みにおける彼らの使命や役割により大変異なったものとなっている。ミュージアムの教育項目と道徳的使命も以下のような他の面から見ると違ってくる。ミュージアムの議題がどれほど討議されたものであるか、それとも意識されていないか？教え方がどれほどはっきりして分かりやすいか、または分かりにくいのか？その原則がどれだけ強引で権威主義的か？平和とは、明らかに武力衝突や戦争が無い状態である、と一番多く定義されてきた。最近では、平和とは公平さ、礼節、人権、持続可能性を求める文化的条件だと定義するミュージアムもある。ついには、平和とは社会的な変革を生み出す人びとの内なる感情や意識だと定義するところも出てきた。ミュージアムの教育的価値や与える影響は、このような定義によっても変わってくるし、またその地域やそのときの文化的背景、政治的な審議、また個々の既得権によっても変わってくる。現在の、そして未来の平和ミュージアムは、ミュージアムの来館者が行動することに意味を見だし、熟考できるよう、動的な環境となる事が期待されている。誰もが参加でき、存続可能で公平な、平和な社会を作るために声をあげ行動することを後押しし、人びとの意識を喚起するため、平和ミュージアムは重大な役割をはたそうとしている。

山根和代は、第2次世界大戦中に日本が他の国にした侵略についての記述を多くの平和ミュージアムや学校の教科書が載せていないとして、日本の若者への教育の不十分さを指摘する。平和ミュージアムにおいて日本の侵略の悪い面を展示するのは難しいと理解できるが、ミュージアムに来る人びとが戦争の事実を学び、これからの戦争を防ぐために責任ある市民としてどのように考え行動すれば良いかを学ぶため、ミュージアムがすべての“真実”を展示する事は重要だ。最近の歴史修正主義の風潮のなかで、大阪国際平和センターのように、現在ある日本の侵略の展示を取り除き、代わりに犠牲者としての日本を展示するようなミュージアムもでてきた。一方で日本を侵略者としても、より意図的に展示している日本の私立の平和ミュージアムもある。女たちの戦争と平和資料館（東京）、平和資料館・草の家（高知）、岡まさはる記念長崎平和資料館（長崎）、ヌチドゥタカラの家（沖縄）、立命館大学国際平和ミュージアム（京都）などがそうである。日本の侵略の歴史的事実を人びとに教える事が重要なのは、日本の侵略による犠牲者に思いを馳せ、共感し、それにより、

人道を重んじる平和な社会へ向けて人びとが自発的に声をあげ活動するようになるからである。

エリック・ソマーズは第2次世界大戦に焦点をあて、オランダのミュージアムに対する評価が高まっている事を挙げている。戦争のいくつかの側面についての関心が大きく広がることによって、公共的、文化的な記憶、国家のアイデンティティが作り上げられた。このようなミュージアムを通して、1940～1945年の期間はオランダの社会にとって道徳的基準となった。記憶を継承する役割を強めるための多くの教育的活動や努力によって、オランダ政府の助けもあり、ミュージアムは人びとの記憶や意味づけ、国家のアイデンティティを形作るのに非常におおきな影響を及ぼしてきた。今日のミュージアムは“真実を体験”したい来場者がたくさん訪れ、非常に体験型、参加型のものとなっているが、「過去の解釈や復元のなかにうまくまとめ上げた歴史の幻想をとまなう、作られた真実がある」というリスクもある。来館者により一層体験的にミュージアムにかかわってもらうことを目指す場合、歴史修正主義的志向に基づいた、ゆがめられ、過度に単純化された解釈をベースに、インパクトのある、感情に訴え、忘れ難い体験を与えるやりかたに対し、責任ある教育、情報提供、人道的価値への訴えかけを達成するためには、これら2つの観点のバランスをとることが課題となっている。

ジニー・ラムは平和ミュージアムの歴史的発展と平和教育の歴史的発展を比較する。平和教育の起源は組織や信頼関係のあるコミュニティ、また関心ある市民による草の根運動で、彼らは特に戦争や暴力など自国の政治主導や活動に疑問をもって活動を始めた。彼らの活動の一連は形式的な学校に限った事ではなく、私的であれ組織的であれどんなフォーラムにも広がり、社会的不公平、非人道性、戦争を含む文化的に公認された暴力についての意識と道義心を高めるものであった。平和教育者の視点からすると、“平和ミュージアム”と呼ばれるあらゆる機関の使命は平和教育だ。平和を世界に広げるといふ目的は平和教育に必要な不可欠であり、平和ミュージアムにおいても必要な項目だ。平和教育者にとって、またミュージアムを作る人、学芸員などにとって、“平和の文化の創造”の新しい規範のために平和の再定義という課題が与えられていることを理解することが重要だ。これは、ミュージアムの空間を開かれた学びの環境と考えることを意味し、それは重要でクリエイティブな思考を含む“飛躍的な思考”としても知ら

れる、総合的な、多面的な思考のために、内省や対話を促す。平和ミュージアムは訪問者、参加者、学習者、世界中の人びとが平和の文化を理解し、作り出し、それを生きるための素材と手法が備わった学習センターへと変化を遂げるのである。

2. 平和博物館の教育的役割

新独立国家ウクライナにおける平和歴史博物館の役割

ウクライナ オレクサンドリーア市平和博物館
リュドミラ・ナイダ

平和博物館が必要なのは何故か？その問いは重要だが、特に未来を担う若い世代にとってその答えはもっと重要である。平和と相互理解は、何よりも家族間から始まるべきである。平和博物館と平和のための関連機関は、なぜ平和が必要なのかを大人も若者も両方が理解するために訪れる場所という大変重要なものである。これが、オレクサンドリーア市平和博物館の行っていることであり、ウクライナでは唯一である。

1987年11月8日に創立された歴史博物館であり、当初は一室だけだった。平和博物館の公式な開館で、ロンドンの国際センターの若い観光客向けのカタログに欧州で最も興味深い場所のひとつと紹介された。国立の博物館と認定されている。1989年以降、国連の名簿に掲載され組織的に資料を入手している。当博物館は、日本、デンマーク、イギリス、スイスの平和博物館や元ファシスト強制収容所跡に開館した博物館と関係がある。1998年、赤十字協会ディプロマを最優秀受賞。広島からは、原爆の悲劇を語った小冊子が進呈された。当館展示全体に流れる鍵となる見解は、文明社会には不要である戦争の狂気だ。書物、写真、地図、図など前世代が経験した悲劇を浮き彫りにし、私達に警告している。ドイツ、中国、アメリカ、イギリスなど各国の代表団が訪問している。1996年、「平和と独立のために戦うウクライナ」をオープン、独立と独創性、文化を維持し平和のために戦うためウクライナの人びとの不朽の努力を再現した新しい展示ホールである。平和ホールには、戦争の結果を示す資料や世界中で盛んな平和のための戦いが必要な理由を示す資料がある。「民俗誌ホール」には、ウクライナ人の暮らしや習慣が描写されている。

当館は異なる歴史をもったさまざまなグループの活動によい場所であり、そのために充分な量の歴史的資料が備えてある。記憶、史実、そして和解において重要な役割を担っている。

記憶、史実、和解を語るための平和博物館における教育部門の重要性

ゲルニカ平和博物館財団教育部門
イドイア・オルベ・ナルバイザ

ゲルニカ平和博物館の開館は2003年だが、教育部門の設立は2006年。さまざまな活動、記念式典、教訓的資料の作成、国内外プロジェクトの参加などを行っている。当部門では、歴史的事実、平和、人権、平和教育などワークショップを提供しており、子ども向けのサマーキャンプも企画している。特別な日を記念し式典を行うことで、ゲルニカ爆撃の生存者が未来の世代に伝えたいと願う「忘れない、復讐しない」というメッセージとともに惨事を振り返ることができる。「キッズゲルニカ」という面白いプロジェクトでは、ピカソの「ゲルニカ」と同じ大きさのキャンバス（3.5m x 7.8m）に、世界中の子どもたちが平和の壁画を作成している。当館は、ゲルニカの他の2つの機関と協力し二年毎に「アートと平和：国際会議」を開催している。

昨今では、ソーシャルネットワークに参加することは、私達のメッセージを発信する新たな方法であるだけでなく、さまざまな現実や活動、組織などと接触し、共同で活動し、グローバルな知識や教訓的資料を利用し、費用を負担しあうことなどができる。

戦争記憶の占有と共有

パネリスト：

1. 論者：ノ・ミョンホアン（韓国外国語大学校 歴史／アーカイブズ学部教授）
2. 論者：キム・ミョンフン（韓国外国語大学校 アーカイブズ学部研究教授）

発表者：ジョ・ミンジ（韓国外国語大学校 講師）

発表者：リ・ジュンヨン（韓国外国語大学校 講師）

発表者：チョイ・ジョンウン（韓国外国語大学校 講師）

戦争を記念する展示：戦争記憶の適正と公共財との間

ジョ・ミンジ（韓国外国語大学校 講師）

朝鮮戦争は韓国の近代史の中で最大の事件であると言っても過言ではないが近年の戦争体験者数

の減少は戦争の公的な記憶が薄れていくことを意味する。したがって物理的・精神的な国民の間のギャップを埋めるためにさまざまな戦争記憶の更新が進んでいる。そのうちの一つが想像力を最大に活用することに焦点を当てた記念的空間である。それぞれの作り手によって異なるものの、どこでも多様な手段を用いた「展示」を通じた教育努力が重要視されている。厳選され、適切に配置された展示物によって史実と来館者を結びつける機能である。特に国立の戦争追悼施設は国家的な記憶の語りに従って展示しており、圧倒的であるが、それに対し、戦争について、市民虐殺をテーマにアプローチする私設の機関はどう違うのだろうか。ここでは朝鮮戦争中に市民虐殺があったノグンリ平和記念公園を中心に取り上げ、過去の問題の解決の成果といえる追悼記念空間における展示物によって戦争の記憶がいかに適正に伝承されているかを論じる。

人権を記録する遺産の価値と展望の拡大：1980年5月18日の記録を核に

リ・ジュンヨン（韓国外国語大学校 講師）

アイデンティティ承認のための闘争は人間の尊厳回復の運動である。世論形成への参加保証は人権の基本要素である。1980年光州で、短期間、未完結ではあったものの、国家権力が抑えられ自治が実現した。この光州民主化運動は市民の連帯、協働、集会や議論による市民自治の可能性を示した。この運動は、人権と民主主義の擁護の価値を評価され2011年にユネスコ世界記憶遺産に登録された。それは民主主義への闘い、そこへ移行する教訓としてわれわれの中に記憶された。ここではユネスコ遺産登録への過程と韓国社会での議論を検討し、史実がいかに今に受け継がれているかを論じる。

ノグンリ事件犠牲者たちの「認識の苦闘」：「記録の序列」に対する視点

チョイ・ジョンウン（韓国外国語大学校 講師）

ここでは、朝鮮戦争中のアメリカ軍の戦争犯罪の一例であるノグンリ事件を取り上げ、ノグンリ事件の被害者集団と社会との視点の相違を考察する。社会は被害者たちが体験した事件の証拠としての記録を要求する。視点の相違は記録作成の主体、記録された時期、記録の形態によっておきる。記録には、序列、上下関係が存在するのである。

ノグレンリ事件が起きた1950年以来、犠牲者たちのコミュニティは声を上げ被害を訴えてきた。韓国政府とアメリカ政府による共同の真実追究調査が始まるまでは生存者の記憶による伝承が「ほんとうの真実」であり証拠であると思われてきた。しかし口伝よりも書類がより客観的だとみなされ、生存者の口伝による記録よりも、加害者側のアメリカ軍、アメリカ政府による証言や記録がより重要視され、皮肉にも加害者の記録が被害者の体験の信頼性を決定づけることになったのである。いったい生存者たちのコミュニティは、それをどう思ったのだろうか。表現の問題を考えるというのは、事実の構成主義の立場を扱うということである。事件があり、生存者たち語ろうとするのだが、社会は多種の表現の条件を示唆し、社会に認知させようとするのである。

第一次世界大戦前夜に逝った偉大なピースメーカー・ベルタ・フォン・ズットナー その没後百年を記念して

パネリスト：糸井川修、ホープ・メイ、ピーター・ファン・デン・デュンゲン
司会：山根和代

オーストリアの平和運動家ベルタ・フォン・ズットナー（1843年プラハで生まれ、1914年ウィーンで没す）は亡くなるまでの25年間、異論の余地のない世界的な平和運動指導者であった。当時の女性としてこれは驚くべき業績である。彼女の感動的な反戦小説「武器を捨てよ！」（1890年）の大ヒットは思いがけず彼女を平和運動への道へと導いたこととなった。

1890年初頭、彼女はオーストリア平和ソサイエティを立ち上げ、ドイツ、ハンガリーでも平和ソサイエティの共同設立にかかわった。同時に世界の平和運動のまとめ役として新たに創設された国際平和ビューロー（IPB）でも中心的役割を担った。また、ハーグで1899年と1907年に開催された重要な公的平和会議でももっとも著名で実績あるロビイストの一人として活動した。1905年に彼女は女性として世界で初めてノーベル平和賞受賞した。その賞は彼女とアルフレッド・ノーベルとの長い交流ゆえに誕生した賞であった。彼女ほど厳しく戦争の再発の危険性を警告し、軍縮と、仲裁、国際法、和解による紛争解決の道を粘り強く説いたものはなかった。

当時もっとも有名な女性の一人であったズットナーは、さいわいというべきか、彼女が命がけで

防ごうとした世界大戦の始まりを告げるサラエボ事件の1週間前、1914年6月21日にその生涯を閉じたのだった。最近行われた没後100年を記念するイベントでは彼女の偉業をたたえ、再確認しもっと広く世に知らせるための多くの機会が提供された。彼女のベストセラー小説の題名となっているそのメッセージは、間違いなく今、これまで以上に理解され、行動に移されなければならないものである。

2005年のノーベル平和賞受賞100周年に際し、オーストリア政府は彼女の偉業をたたえる巡回展覧会を世界各地で主催した。2013年には国際司法裁判所が置かれている威厳ある建物に女性としては初めてズットナーの銅像が建立され、ハーグ平和宮の設立100周年が祝われた。没後100年である今年はずで、世界各地とりわけウィーンやハーグ、日本でも記念行事が行われている。彼女は6月に町の中心にオープンした平和博物館の卵と想像的な「平和への窓」街角ミュージアムの重要なシンボルとなっている。

パネリストたちはみなこれらズットナーを記念するイベントに深くかかわっており、その成り行きや、反戦平和に献身し今も世界中の平和を求める者たちを励まし続けている彼女の生涯について語っていく。

糸井川修：愛知学院大学

ベルタ・フォン・ズットナーの反戦小説『武器を捨てよ！』（1889）について、彼女の友人であるアルフレッド・ノーベルは世界への普及を期待し、こう述べた。「明らかに、あなたの見事な作品が翻訳されなくてもよい言語、その言語で読まれなくてもよい、学ばれなくてもよい言語などひとつもありません」。しかしヨーロッパにおける彼女の評価と対照的に、日本ではズットナーはよく知られていない。それは第一に、長い間『武器を捨てよ！』の邦訳がなかったからである。この状況を変えるために、日本のベルタ・フォン・ズットナー研究会（発表者と山根和代氏はその設立メンバー）は、2011年にこの小説の初の邦訳を出版した。日本では小説の邦訳出版と並行してベルタ・フォン・ズットナー展が数回開催され、これらの活動が彼女の生涯と作品の日本における再発見、再評価に貢献している。私の発表では、ベルタ・フォン・ズットナーの日本における受容とベルタ・フォン・ズットナー研究会の活動を紹介し、戦争を廃絶するための平和運動の先駆者である彼女から、今日私たちが学べることを指摘したい。

ホープ・エリザベス・メイ：米国中央ミシガン大学

私の発表では、二つの関連トピックベルタ・フ

オン・ズットナー没後100年と、ベルタの米国平和教育との関わりを紹介したい。まず、ベルタ・フォン・ズットナー没後100年記念活動としてハーグで主催した1914年の映画版『武器を捨てよ！』の英語初上映と、平和宮で行われたベルタ・フォン・ズットナーについてのマスタークラスなどを語り、そしてベルタ・フォン・ズットナーが関わったさまざまな平和教育的イニシアチブを紹介したい。公開講演で彼女は、平和運動の目的を実現するための教育の重要性を繰り返し主張した。そして、米国教育省が平和教育を（第一次世界大戦までとはいえ）正式に支持したので、フォン・ズットナーは米国を「平和教育のゆりかご」と呼んだ。米国の平和教育努力との関わりとその中の記念活動を語るだけでなく、フォン・ズットナー没後100年である今こそ、彼女が高く評価した米国平和教育のモデルを発展させるよい機会であることを指摘したい。

ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン：英国ブラッドフォード大学

第一次世界大戦100周年、ベルタ・フォン・ズットナー没後100年、ベストセラー反戦小説『武器を捨てよ！』出版の125周年でもある今年は、ベルタ・フォン・ズットナーが行った将来の戦争を防ぐための英雄的な努力を記念すべき時である。フォン・ズットナーと他の勇ましく洞察に満ちた平和運動家たちが、世界が戦争に巻き込まれないように命を捧げたことと、1914年の戦争開始にもかかわらずその努力は無駄ではなかったことを認めるのは歴史的正義である。小説のタイトルで含まれているアピールは今までにないほど時を得ていると主張したい。今日生きていれば、小説のタイトルを『核兵器を捨てよ！』にしたかもしれない。これから4年間、全世界で行われる第一次世界大戦100周年の記念式では、平和運動の声が響かなければならない。そうでなければ前世紀の世界大戦よりもさらに残酷な災害がこの世界で一計画的にであれ軽率にであれ一生じめることは可能である。国連安全理決議第1325号で義務付けられているように、政策決定に参加する女性の増加は重要な前進の一步である。この過程では、ベルタ・フォン・ズットナーは平和運動家を励まし、鼓舞するのだろう。

ポスター・セッション

カンボジア平和博物館：和解に向けて：ブリーズ・アメリカ

カンボジアの過去はいまだ大きな政治問題であり、カンボジア国民が直面している課題はいかに過去の対立を引き起こすことなく共通の歴史を作り上げるかということである。カンボジアの教育制度では、クメール・ルージュ民族虐殺に歴史教科書の1ページを割いている。なぜ貧しい人民がそういった方法で蜂起したのかという説明や、数世紀に及ぶ「低いカースト身分」の農民への不公平や抑圧の記述は全くない。単に政治・教育制度のせいだけではない。その時代に苦しんだ多くの人が、過去は語らず前に進んだ方が楽だということに気付いており、その結果、次世代に語る事が容易ではなくなってしまった。

平和博物館は、より平和な未来を追求するよう動機付けるという形で、カンボジア人に彼らの過去を学ばせることができる。いまなお過去の苦悩を抱える者たちに、その傷を癒す場を提供することができる。集い、思い出し、理解し、忘れるための場所を。

最後に、カンボジア人の彼ら自身への考え方を変える手助けをすることができる。国家として、カンボジア人は過去について誇りを持ってはいない。カンボジアの平和博物館は、国の根深いトラウマにも関わらず、過去を理解し、平和への目覚ましい歩みを進めるカンボジアの成功を実証する仕組みとなるだろう。カンボジア人の努力を賞賛し、過去の痛みを明らかにし、共通の歴史を作る道筋となりうる。

ポスター移動展覧会 広島・長崎 原爆の壊滅的影響：ラナ・エティシヤム・ラバナ

2013年12月、パキスタンの主要都市ラホールにおいて、アルハムラン芸術委員会主催の3日間のポスター展が広島平和記念資料館と共同で行われた。（サイズ32cm x 22cm、30枚のポスター）続いて、ラホール最高裁判所弁護士会、オカラ地方弁護士会、ラホール・フォアマン・キリスト教大学、ラホール・キネアード女子大学にて同様の展示が催された。判事、弁護士、専門家、学生、記者など男女ともに数百人が訪れた。以下のようなコメントが寄せられた。まずは、特に遠方からポスターを見に来た、2人の子供連れの若い女性のコメント。

「とても情報価値があります。日本人に同情を感じ敬意を表します。原爆反対、世界平和を望みます。日本は国のために大変努力しました。子供達も私達もこの努力を素晴らしいと思い賞賛しま

す」

「こんな写真を見るのは辛い。人間が文明のある生き物だとは思えない。だめだ、だめだ、だめだ」
「こんなことは終わりにしなければならない。見た後は恐ろしくなった」

人類の歴史は主に書籍の中に保存される。博物館は、われわれの人生の案内人となる。展示は人間の思いを映している。そこから人びとは事実を、戦争の恐ろしさを知る。全世界の博物館の写真やビデオからなるカタログを作成・準備することで、より幅広い人びとがポスターやそういった形で歴史的観点に触れることになる。この企画は、国際平和博物館の事務局の指揮のもとユネスコの協力と支持を得て実現可能である。皆に愛を、皆に平和を。

ラナ・エティシャム・ラバニ：スイスGAMIP 役員、
ネパール APAMIP 会員、パキスタン 平和と博愛フォーラム会長、オカラ 地方弁護士会元会長

分科会

国際的核兵器禁止条約のための平和博物館のサポートの必要性

マリア・E・ビヤレアル

核兵器は大量破壊兵器の中でもっとも破壊的であるにもかかわらず、核兵器だけはまだ国際条約で禁止されていない。国際的な核兵器禁止はすでに遅すぎるが、世論の圧力と政治的リーダーシップをもって、近い将来実現するのは可能である。核兵器禁止は、各国の核兵器保有と加工処理を非合法にするだけでなく、完全廃止の第一歩にもなるだろう。廃止の実現を目指している国家と市民社会はすぐにでも廃止のための交渉を開始するように主張すべきである。核兵器の壊滅的な被害を仮定すれば、核兵器の禁止と廃止は唯一の責任ある行動である。平和博物館は平和創造のステークホルダーとして、この国際的イニシアチブをサポートすることができる。そして人権を尊重し、戦争を防ぐという共通目的を国家と共有し、パートナーシップを築くことが可能である。核兵器のない世界の価値観に従うように政府に圧力をかけ説得する活動が、平和博物館には可能ではないか。国際的核兵器廃止条約は平和博物館の主義と義務を達成するひとつの方法となるだろう。

広島・長崎原爆投下の記憶 平和博物館を通じ次世代を守るために

広島・長崎を繰り返さない：平和博物館

2013年11月、核戦争防止国際医師会議は、南アジアにおける限られた地域的核戦争による気候や農業への影響を分析した報告書「核による飢餓：20億人の危機」を発表した。核が原因で世界規模の食糧不足が起こり20億人以上の人びとを危険にさらす恐れがある。そうした飢餓が引き起こす伝染病やさらなる紛争が、さらに数億人を危険にさらすであろう。その結果、1) 核による飢餓、2) 核のオゾンホール、3) 核の冬、4) 死傷者 をもたらさざるを得ない。現在、インド、パキスタンは核兵器反対であると率直に宣言しているが、二カ国間には敵意や誤解が存在する。150キロトンの核爆弾がボンベイのような街に使用されたなら、使者は8660000人までになる可能性がある。広島・長崎爆撃の写真展示で、戦争の恐ろしさを伝えようとしているのではなく、いかに平和が脆いかを考え、戦争の恐怖を次世代に伝えるためである。平和博物館で絵や写真、その他の形で歴史を旅することは、人びとを平和教育へと導くことになる。

後の世代は核兵器の残酷さや戦争の残忍性を理解するだろう。博物館の展望と使命は、平和教育の総合的洞察への貢献である。戦争記憶の展示の痛ましい表現は、地球の掛け替えの無さや命の尊さを示すことで、私達に平和を熟考する機会を与えてくれる。歴史書やインド、パキスタンなど世界中の学校で戦争や広島・長崎の原爆投下について語られることで、若い世代の心の内に平和が促進されるだろう。ホロコースト博物館、ノグンリ平和記念公園、その他世界中の平和博物館が、視覚的、または他の資料をもって人びとを平和教育へと導く。核兵器反対の社会運動は平和博物館によって成就することができるだろう。平和博物館の目的は、世界規模の活動と団結のひとつのツールとなることだ。世界中の草の根平和博物館や組織の役割は、核兵器廃絶を達成する推進力となることである。今こそ、人びとや為政者らへ働きかけ、核爆弾の恐ろしい影響を伝え気付けさせることが大変重要なのである。平和博物館と平和博物館ネットワークは、共通理解を図り、平和構築の教育を育成し普及させることが可能である。また平和博物館を見解の手段・発信元とし、平和に関する新しい知識を収集し、平和を作る場所にすることが可能である。

「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」を代表してのご挨拶

代表理事 岩佐 幹三

被爆から69年、原爆被爆者の高齢化が進む一方で、戦争も原爆の被害もほとんど知らない人びとが国民の大多数を占めるようになってきました。そのような世代の人びとに、人類史上未曾有といわれる核兵器の被害を受けた原爆被爆者の体験をどのように伝え、どのように受け取って平和な未来に向けて活かしてもらえるか、という大きな課題に直面しています。私たちは今、このような課題にチャレンジするために「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産の継承センター」の設立をめざしています。そのセンターは、被爆者たちによる原爆とのたたかいを人類のあゆみ・歴史に刻むアーカイブスであり、原爆がもたらした「死」と「生」に関する証言を散逸させず、形ある記憶遺産として後世に伝え継承し、核兵器も戦争もない世界をきづく「平和の砦」となるものです。いずれ被爆者たちが居なくなった時代においても、その遺産を継承します。

分科会

「おお、あなたはあちらからきたのですか」
韓国民と北朝鮮難民の分断をつなぐ架け橋としての博物館教育

パク・イエスル

1953年の南北分断から60年、地理的、文化的分断によって両国の人びとの間に偏見、不信が生じてきた。そのため脱北者は韓国に定住しても、ひどい不平等や差別を体験している。脱北者の再定住は韓国が直面する重要な問題であり、韓国民との溝を埋めるための方策が急がれる。平和的な文化をそだてる取組の一環として、このプロジェクトはアートミュージアムでの対話にもとづいた教育によって相互理解をうながす方法を提示している。この研究は社会学、歴史学、芸術療法、博物館教育など多彩な分野の調査から導き出されたものである。朝鮮半島におけるナショナリズムに詳しい美術史研究者のホン・カルと社会学者ギ・ウクシン、脱北者の体験を研究するステファン・ハガードとマークス・ノーランド、アメリカにおける博物館教育原理と教育法を論じるジョン・フォークとリン・デアキングの研究成果に負うところも多い。また本研究は、社会的、政治的な変革をうみだすための対話の持つ力についても言及する。この研究は、心理学者パトリシア・ロムニの対話理論と、セトネット校という韓国在住の脱北者のオルタナティブスクールでの実践との関連を中心に論じている。この学校は脱北者が韓国社会に溶

け込んでいくために文化教育と対話に力を入れて教育をおこなっている。

研究結果は美術館を拠点とした教育が芸術活動を使って社会問題や朝鮮の歴史についての対話をみちびき両者のギャップを橋渡しするのに効果をもたらすと結論づけている。本研究は南北朝鮮の学生の混成グループ向け博物館教育モデルを提示する。このモデルは朝鮮の歴史、文化の異なった側面を代表する三つのアート作品とリンクしている。2013年に韓国国立現代美術館で展示されたものである。

ベトナムにおける平和の歴史的特色

ハン・ミン・ホン

ベトナムの平和の歴史は、抵抗戦争の歴史でもある。私は侵略者から国を守り平和をもたらしたベトナム戦争に参戦した体験を持ち、それを誇りに思っている。紀元前7世紀から今に至るまで、ベトナムは21回の抵抗や戦争を経てきた。秦の侵略に始まり、近年ではクメールルージュ、中国への抵抗戦争がある。ほとんどの闘いは侵略者から国民を守るための闘い（平和のための戦争）で、戦争を回避するための最大限の努力をしてきた。このセッションではベトナムの4つの平和の特色を紹介したい。

1975年の南北統一以降も、ベトナムは国境を守るための2つの戦争を経験したが、その後、東南アジア諸国とも連携し平和を維持してきた。しかし今、海洋法に関する国際連合条約にもかかわらず中国は東海における石油採掘基地を含む我が国の海域を侵犯し、領土拡大の野望を誇示し続けている。現在この東南アジア地域の平和が深刻に脅かされているといえる。ベトナムは、自国と近隣諸国の平和のため、国際法に基づく平和的な方法で戦争を回避し、国家主権と平和を守ろうとしている。1945~46の戦争危機を回避した歴史事実、現在進行中の現実からこのような戦争回避はありうると強く信じている。ベトナムは抵抗のための戦争を体験しただけでなく陸、海、島嶼の主権を守る力を持っている、しかしもっとも重要なことは、ベトナムは二度と再び戦争に巻き込まれたくないということである。

革新と統合的アプローチを通じた記憶の回復、史実、和解

ジュネイド・エラヒ

概念としての平和とその持続要因は、概念から

制度への転換があった時のみ成就される。グローバル平和博物館を通じた平和の推進は、単なるプロジェクトではなく平和と寛容の文化を導入するための活動である。パキスタン初の平和博物館の創設は、平和、寛容、異教徒間調和の本質を理解し評価するための基盤を形作るものだ。平和とは心の状態である。この哲学を元に、計画されているプロジェクトは、地域社会への刺激、奨励、動機付けを目的とする。市民への平和教育と世界平和貢献の重要性の強調をもたらすものである。当平和博物館の主な目的は、平和構築の重要性に対する理解を与える牽引力、動機となることだ。グローバル平和博物館は、政治的、観念的、地理的な境界を越えて統一した平和の課題を採択し提示するものとする。コミュニティベースの博物館が平和教育や次世代へ引き継ぐのための手段としてGPP 中央平和博物館と関連している唯一の土台となるだろう。GPP平和博物館は、平和、建設的社会改革、人権の普遍的尊重に必要な条件を築くのに役立つ教育、技術訓練、学習教材などを提供する学者、学生や研究者らのための重要な情報源となる。また、多くの特別展示会、会議、研修やイベントなどを毎年主催する。常に世界平和に取り組む革新的発想を築く努力をしていく。

分科会

ピースメーカーを褒めたたえよう

シュウ・ゼン

どの時代にも己の信条に従って勇敢に不正に立ち向かい平和的社会を求めてリーダーシップを発揮した人物がいる。ガンディ、キング牧師、マザーテレサなどピースメーカーは、宗教、哲学、政治、芸術、人権、教育などさまざまな分野にたくさん存在する。

まず紀元前6世紀の古代中国の偉大な哲学者で詩人である老子の叢智に焦点を当てる。老子は言った「他者への暴力は必ず自らに跳ね返る」また釈尊は言った「相手の中に自分を見る時どうして相手を傷つけられようか」

孔子、イエスキリスト、ベルタ・フォン・ブットナー、ネルソン・マンデラ、ジョンレノン、ジミー・カーター、オノ・ヨーコ、ティク・ナット・ハーンなど・・・。

彼らの人生、行為、挑戦、貢献は教育的で刺激的である。中には内向的なものもいるが彼らの勇敢な行動は世界を変えた。

ピースメーカーの真価と特質はなにか。以下10の項目を挙げた。

1. 正義への使命感と信条 2. 不正に対する勇氣ある行動 3. 誠意と信条に基づいて行動する

自信 4. 献身的でたゆまぬ努力 5. 逆境、苦悩に耐え抜く力 6. 不屈の決意 7. 寛容と共感 8. 動機づけと逸脱 9. 人間愛と平和な世界への希求 10. 他者を行動へと触発する能力

われわれはみなピースメーカーとなる素養を持っている。世界が暴力に溢れていても先見の明を持ち闘いと暴力から平和と調和へと会話を変えることができる。彼らの夢、努力、貢献によって、ピースメーカーは世界を変えてきた。平和博物館を作るという決意をもつわれわれはピースメーカーである。ピースメーカーを褒めたたえよう！

平和と和解を促進する良心のシンボルとしての聖人たち

ヒナ・イクバル

イスラム神秘主義者やキリスト教の聖人たちによる幅広い芸術や宗教的調和と和解への貢献は、類まれなものであり共通する文化的規範や価値の一貫した要素であると認識されている。従って平和博物館に展示されるこれら芸術品は、その最高の道徳と倫理原則、社会調和の理想を具現化し精緻に表現するがゆえに、平和を概念化する方法、国際社会の紛争解決の方法に直接的な影響を持つことになる。よって、文化の多様性、遺産、良心のシンボルとしての聖人たちの重要性を、平和博物館で下記の肖像を通して展示することが可能である。

- ・イスラム神秘主義者の黙想の伝統、寺院建築、イスラム神秘主義の実践、式典、儀式、関連の精神的方法のジオラマ展示
- ・詩、音楽に合わせた物語や愛の教えに明言される平和のメッセージのドラマ化した展示
- ・洗練された細密画、カリグラフィー、精巧な装飾美術や、特に平和や和解を促進し伝えひろめる、数珠、托鉢の椀、杖、筆記用具などのイスラム神秘主義者たちの個人所有物
- ・より多くの来館者や学生、学者、研究者が平和構築と和解のためのその業績と貢献から利益を得られるよう、さまざまな地域、宗教のさまざまな聖人たちの記録文書を英語でデジタル化する

従って、より広い討論と世界の連帯と平和の概念のため、あらゆる宗教の信者間の隔たりを橋渡しし皆を一体していく不可欠な要素として、平和博物館を通じたキリスト教聖人やイスラム神秘主義者たちの解釈は、世界中の平和博物館が導入可能なもうひとつの選択である。

分科会

子どもの人権 キルトプロジェクト

ニツァ・ミラグロス、ティファニー・ ジェンキンス：パソス平和博物館

未来の平和を作る子供達を動機付け、結びつけ権利を与えることにアートと教育をもって取り組むパソスは、子どもの権利条約調印25周年に関心を集めることにした。キルトの表現的、協力的、教育的な過程を通して、子ども達が彼らの人権について学び生かすためのK-12カリキュラムが、同様のプロジェクトを立ち上げる予定の姉妹博物館と共同で開発されている。

「キルトはあらゆる種類の人を団結させる。世界中で、その長く、豊かで多様な伝統がある。キルトのパネルを組み立てて他の人のパネルと結合させると、参加者達は平和構築が創造的なプロセスだと気付く。さらに、完成したキルトは、『人の社会構造や私達の暮らしや活動、そして紛争のパターンでさえも』平和構築の過程の中で繋がっていることを描き出す」

キルト制作のある専門家はこう推量している。この古代からの世界的な芸術形式が存続しているのは「コンピューターや電機などのような『硬い』物質に囲まれた社会の中で、キルトは感触の良い特質を持っているからです。人には、芸術を作りたいという本能があります。過去の世代と繋がりを、私的な挑戦の感覚を持つのです」

完成後、子どものキルトプロジェクトは、子どもの権利に関するより大きな地域的で世界的な議論の場となる当館のバーチャル画廊に展示されることになる。博物館の来訪者やキルトの見学者、そして個々のキルトパネルが集められ、各地域社会が保護し権利を与える責任について考える。来訪者、見学者もまた、文化の壁を越えた子どもの権利の多くの解釈方法を考える機会を持つことになる。家庭、地域社会、そして世界の中で、さまざまな文化的・経済的背景のある子ども達がこの権利が行使されることを想像する。文化を超えた類似点や相違点は、こどもの権利のさまざまな面を反映するだろう。

和解に通じ得る理解

ショーシ・ノーマン：イスラエル、ガリラヤ
研究所 中東宗教研究センター長、学芸員

現在も続く紛争の中、二国間の理解の架け橋になるユダヤ（イスラエル）とイスラム（アラブ）の芸術家たち。これは、イスラエルの異なる社会出身（絶え間ない紛争の中にありお互いを敵と言い及ぶことさえある）の2人のアーティスト間のプロジェクトである。

自らをイスラエル在住のアラブ系ムスリムでパレスチナ人のアーティストだと称するアハマト・カナンと、ユダヤ系イスラエル人のモシェ・カシラー。ユダヤ人とアラブ系イスラム教徒が、別々のコミュニティではあるが、共に暮らすガリラヤ地区にこの二人は住んでいる。ここは長年、いい時期も悪い時期もあることで知られている。2人はともに、それぞれの民族の伝統や歴史を大切に思っており、その歴史は彼らのアイデンティティの一部でもあり彼らの作品の一部でもある。モシェ・カシラーは、イスラエルの人びとが自らの王国がイスラエルとエルサレムにあり、彼らの神に直接的つながりを持っていた時代に触れる。アハマト・カナンの古代史は、ユダヤ人がエジプトからイスラエルに来る前の時代と、国が他国人に居住されていた時代までの両方に及ぶ。アハマト・カナンの姓はその時代にイスラエルに存在した民族のひとつ、カナン人に由来する。また、それはイスラエルにある聖地の十字軍による占領を打開した英雄サラ・アディンによってイスラム社会が統一された時代でもある。

彼らはまた、作品の中で彼らの国の近年の歴史についても触れる。アハマト・カナンは、イスラエルの国が築かれた1948年の戦争中のパレスチナの大惨事（地元のアラブ人コミュニティにとって、これはナクバー災難として知られる悪夢である）をテーマとしている。モシェ・カシラーは作品の中でユダヤ人の第2次世界大戦での大惨事「ホロコースト」を描いている。

こうした連携は非常に珍しく、どんな国もどちらの歴史が正しいかを特定することなく他方の物語を受け入れることが可能であることを示すものである。この連携は理解が和解に繋がることを明らかにしている。私は、この特別なケーススタディが他の紛争中の社会においても実行されうると信じている。世界の他の地域のさまざまなコミュニティ間においても、彼らの力と表現をもってアーティストらが架け橋となることができると確信する。

分科会

平和博物館の保管記録文書の価値：ジョン・ラーベ平和博物館を例として

ヤン・シャンユウ：中国南京大学ジョン・ラーベ記念ホール館長、副調査員

国際平和博物館は平和をテーマとした歴史博物館である。博物館そのもの及びその展示物は世界平和探求における歴史上の人物や出来事の記録である。ジョン・ラーベ平和博物館は国際平和博物館のひとつとして、調査と平和と和解の交流の場

の役割を担う南京大虐殺の歴史的証拠である。本論文は3つの異なる視点（ジョン・ラーベ平和博物館の記録文書、その価値と特徴）に焦点を当てている。さらに、歴史の記録、戦争反対、平和探求における国際平和博物館の役割の重要性を強調する。

文化的場における和解と史実の記憶：ケニヤ地域平和博物館の20年

ケニヤ地域平和博物館遺産財団創業者：
スルタン・ソムジー博士

1994年、牧畜業者（遊牧民）8グループが関わる物質的文化プロジェクトがケニヤにて創設。ルワンダからソマリアの東アフリカ地域を席捲していた民族紛争が激しさを増していた頃である。今日、このプロジェクトは地域平和博物館遺産財団（CPMHF）の傘下にある農業専門家グループを含む広範囲の民族に及ぶまでに発展している。

この論文は、まず民族紛争の状況へと繋がる広範囲の植民支配後の政治的及び歴史的観点を論じている。そして、一部は記憶を、また一部は現場支援研究報告書や録画など地域平和博物館（CPM）の記録を基に、その発展を明らかにする。1994年から2003年までのCPMの最初の10年間、概ね地域から学ぶプロセス及び民族間の知識の共有を経たため、博物館は一般参加型と同時に地域所有のものとなった。

ウィーン平和ミュージアム：エリザベス・プロジェクト

平和の窓 — 世界

博物館とは、見学者が訪れる施設に同じ種類の興味深い何かを集めて展示し、通常は料金を取るものだが、来場するか入場料を払うかは、見学者次第である。博物館が街角にあれば、その選択肢がないため見学者を確保できる。世界初のストリート博物館であるウィーン平和博物館は、ウィーンやその他の都市での「平和の窓」プロジェクトで世界中に平和思想を広められることを願っている。

現在のプロジェクト

「ウィーン平和の窓」は、平和を象徴する150人以上の偉人たちから成る。歴史を通して平和に献身し人生の目標としてきた人びとを紹介する。私達の「平和のヒーロー」は、ベルタ・フォン・ズットナーやマハトマ・ガンジーなどの著名人から、余り知られていないエマニュエル・ジャル、シーリーン・エバーディなど影響力の大きい人びとだ。英語と独語で概要を記した平和ヒーローの

写真が、参加した店舗や住宅の一階の窓に彼らの篤志によって設置されている。

プロジェクトの将来

6月17日のオープン以来「平和の窓」プロジェクトは、オーストリアのインスブルック、ウィーンのおッタクリング、アフガニスタンのカブール、ポルトガルのリスボン、フランスのパリ、セントラル・ミシガン大学、ソウルのマウント・プレザント、キプロスのニコシア、アリゾナのスコッツデールでの開催を計画している。私達の目標は、人びとを喚起させ各地域でも「平和の窓」を再現させることだ。「平和のために私達に何が出来るか」といった平和についての対話を引き出し、こうした見学者との議論が新しい平和プロジェクトのきっかけとなる。

シエラレオネ平和博物館 — 残虐行為、平和、記憶と再建を語る：セス・フランケル

1991-2002年の残虐な内戦の勃発に責任のある者を罰するため設置された国際法廷であるシエラレオネ特別法廷の扉が閉められ、2013年12月、シエラレオネ平和博物館は一般に公開された。この新しい博物館は、西アフリカにあるこの種のものの中で、内戦の根本的原因と歴史、国の平和の構築と一度荒廃した国の再生という大事業に取り組んだ初めての博物館である。

著者略歴：セス・フランケルは、博物館設計および展示開発コンサルタント。フランケル氏は米国コロラド州ボルダーにあるスタジオ・テクトニックの長である。20年以上に渡り、スミソニアン研究所や国際的に有名な多くの組織を含む広範囲の博物館を手がけてきた。フランケル氏は、米国ニューヨークに本部を置くICSC:International Coalition of Sites of Conscience (国際良心の場連合)のメンバーであり、展示作成においてメンバーの博物館の支援のため随時ICSCにコンサルテーションを行っている。

シンポジウム

軍隊を廃止した国 コスタリカ：平和博物館設立プロジェクト

マヌエル・アラヤ・インセラ：
平和と人類の進歩のためのアリアス基金

① コスタリカで平和博物館を設立するわけ

コスタリカで平和博物館を設立する目的は、教育プログラムと展示を通じて交渉や非暴力的手段で紛争を実際に解決してきた社会の政治的価値観を深め、そして不滅のものとするものである。ま

た、コスタリカの経験を紛争の原動力と国際的レベルにおける紛争解決の枠組みの中に表すことを目指す。

(ア)1948年には、武力攻撃が発生する明白な危険があるにもかかわらず、コスタリカの事実上の政府が軍隊を廃止した。それは平和的価値への全面的な献身および国際法律への信頼を示した自主的な武装解除であった。以来、国境と国家主権へのさまざまな脅威に対し、軍事介入なしで対応、解決してきている。

(イ)1970年代から1980年代にかけて、中米における各国の内戦は、内乱から国際紛争にエスカレートする明白な危険性を引き起こした。武力衝突がコスタリカの国境を超える脅威に対応するために、当時の大統領、オスカル・アリアス率いる平和的イニシアチブは、中米の軍事衝突終結の基盤となるエスキブラス平和協定を作った。これは、どんなに深刻な危機であれ、紛争解決には軍隊も武器へのアクセスも不要であることを証明した。コスタリカの軍隊全廃は過去66年間にわたり政治的安全および民主主義の強化によい影響を及ぼしてきた。

② 目的

(ウ)このプログラムの目的は以下のようである。紛争解決の過程を研究、発掘、保存、分析し個人的であれ国際的であれ非暴力的紛争解決の利益を促進し、コスタリカの歴史を通して発展された平和文化および平和への権利の尊さについて教え守り、最後に、平和共存の現実可能性を示すことである。

③ プログラム

博物館の使命と目的に関する展示、出版、視聴覚資料などを作成する研究が行われる。平和資料の記録と保管とともに、博物館の係員は資料の登録と保存、修復などをする。博物館の内容と研究結果をワークショップ、出版、上映などの活動を通じて、聴衆の年齢と事前知識及び関心度に合わせて世界中に広めることを目指している。人類社会のニーズと願いを満たすために、寛容性、相互尊重、平等性を促進しながら、入館者のために平和と平和的な紛争解決について価値観に基づいて学ぶ機会を作ることが目的である。

ゲルニカ平和博物館財団：暴動後の社会的メモリーマップを作成する活性剤

**イラッチェ・モモイショ・アストルキア：
ゲルニカ平和博物館財団理事長**

ゲルニカ・ルモ市は、スペイン北岸のバスク地方に位置する。当市はスペイン内戦中に、恐ろし

い内戦を兄弟姉妹間で始めたフランシスコ・フランコのクーデターを支持したドイツ・コンドル軍団とイタリア空軍によって壊滅させられた（1937年4月26日）古代からの象徴的な町である。非武装都市に対する凄まじい爆撃では1600人以上が殺された。スペイン内戦終了後（1939年）の戦勝者（40年間のフランキスモ独裁政権）による公式見解では、逃亡しようとしたバスク分離主義過激派の焼夷爆撃であるとされ、誰も真実を語ることはできなかった。数人の当時の従軍記者の記したニュースや「ゲルニカ」と題されたピカソの有名な芸術作品のおかげで、実際に何が起こったのか世界が知るところとなった。

爆撃61年後の1998年、（スペイン内戦ではなくゲルニカについての）事実と和解の長期にわたる過程の後、独裁は終わりを告げ（70年代終盤）、市議会によってゲルニカ平和博物館が設立、後にバスク政府とビスカヤ地方政府、ゲルニカ・ルモ市議会の管理下で財団法人となった。現在、当館はスペインにおいて比類がなく、過去を伝え記憶するだけでなく将来のための博物館である。

常設展では、見学者に下記の3つの問いを投げかける。

1. 平和とは何か？
 2. ゲルニカ爆撃の遺産とは？
 3. 今日の世界における平和と人権の状況は？
- そのほかに、記憶、歴史、平和と人権といった題目で毎年数回の展示を行っている。

当館は、教育機関、資料館として機能し、IC-MEMO (ICOM)、INMP、過去に誠実に向き合う国際遺跡協会などソーシャルネットワーク上やさまざまな博物館国際ネットワークでの活発な活動を行っている。最近では、ゲルニカの他の機関とともに特にドイツとの和解に全力で努めている。

現在、人権問題と近年のバスク地方の暴動に関する常設展の一部を再編中である。他の2機関とともに暴動後のメモリーマップを制作するため記憶研究所(MemoryLab)を設立させる新プロジェクトを計画中である。プロジェクトの総体的目標は過去を振り返ることで社会的記憶と和解に貢献することである。

ワークショップ

**ピースマスクプロジェクト
キヤ・キム (Kya Kim)**

社会はさまざまなシンボルで溢れかえっている。それらはどちらかと言うと、有害なものが多い。関係性を作り上げ、信頼と平和に繋がるような意味のあるシンボルには、深い洞察と反省が

込められていなければならない。ジャーナリストであり活動家であるKya Kimが進めるピースマスクプロジェクトは、この「より深い表象」を具現化する。Kyaとピースマスクプロジェクトチームは、手で作られた紙製の精緻なフェイスマスクアートと異文化間の対話を通して、シンボリズムに革新のパワーを与える。このコミュニティベースの活動は、国境を越えた人びとのこころの融合と理解を目指している。

今年12年目を迎えるこのプロジェクトは、日本、中国、韓国の若者999人のピースマスクを作る取り組みを始めている。この危機的時代において、三つの国の共通の文化、奥底に潜むルーツを表現するためである。この1年にわたる取り組みは、未来の平和のための才能にあふれた特別な若者たちを育てることも目的にしている。東アジアピースマスク最終発表会は三カ国の首都で開催される予定で、若者たちの価値、独特さ、素晴らしい人格、東アジアそして世界の平和で健康的な未来への希望を表現するだろう。

海外の平和博物館のニュース (INMP 通信 No. 9 の日本語版) は、次のホームページで読むことができます。

http://inmp.net/attachments/article/42/newsletter%209_Japanese.pdf

福島原発事故の教訓をいかに学ぶことが出来るか

安齋育郎 安齋科学・平和事務所

2011年3月11日の東日本大震災で起こった東京電力福島原発事故以来、今では毎月被災地を訪れ、放射能環境を調べ、どうすればより安全な生活が出来るかについて実践的な提言活動に取り組んでいる。思い起こせば、私は、40年来日本の原子力発電政策を批判し、1970年代の初頭以来5000枚に及び講演活動や、100冊を超える執筆活動を通じて日本社会に原発政策の危険性を訴え続けてきた。それにもかからず、日本が原発依存に突き進むのを阻止することが出来ず、福島原発事故のような過酷事故が起こることを防げなかった。

執筆活動や講演活動にある種の限界を感じる一方、しばしば一枚のアートや写真が事の本質を心に突き刺さるように伝える効果をもつことをしばしば経験している。

たとえば、右写真の月見草は、福島第一原発近くの檜葉町で観察されたものだが、左右の正常な花に比べて、中央の株



はきのように太い。こうした異常株はたった1本で、ただならぬことが起こっている事態の本質を突きつける。今後とも、科学的な事実（それは本質的に重要だが、しばしば地味で、理解に努力を要する）に加えて、本質を心に鋭く突きつける写真やアートの魅力的な効果を組み合わせ、平和博物館の展示を「ハート・キャッチングで思慮深い」ものにする努力を続けたい。そのためにも、平和博物館と写真家・アーティストの関係を強め、博物館は特約契約を結んだ写真家やアーティストに表現の場を積極的に提供することも大切だろう。

DVDの紹介

THE GHOSTS OF JEJU by Regis Tremblay

济州島^{チェジュド}のゴースト達

济州島の米軍基地をめぐる闘いに関する映画が完成し、日本語の字幕がついています。

字幕翻訳は石川晶子氏と黒木鞠子氏が担当。

1本2000円+送料とのことです。

詳細は次のホームページでわかります。

<http://www.theghostsofjeju.net/>





出版物

『決定版 東京空襲写真集—アメリカ軍の無差別爆撃による被害記録』（定価：12000円）

早乙女勝元 監修

東京大空襲・戦災資料センター編

1400枚を超える写真を集成。戦争の惨禍を知り、平和への願いを新たにする。これまで紹介されていなかった写真もふくめ、東方社、日本写真公社、石川光陽などの写真を日付ごとに網羅。詳細な解説と豊富な関連資料を付す。戦後70年、東京空襲の全貌を明らかにする決定版写真集である。

『沖縄 社会を拓いた女たち』（1500円）

高里鈴代・山城紀子 著

（沖縄タイムス社）

命の尊厳、生きやすさ、平等、平和を求め、それぞれの分野で確かな足跡を残した24人を取材。次世代へ向けた新たな沖縄女性史。

『語りつごうヒロシマ・ナガサキ』全5巻

（各巻2700円、5巻セット13500円）

安齋育郎文・監修

（新日本出版社）

第1巻「天からふってきた悪魔」、第2巻「キノコ雲の下でおきたこと」、第3巻「歴史を未来にいかす」、第4巻「核兵器とはどういうものか」、第5巻「平和について考える」。小学校中高年以上を対象に、広島・長崎被災70周年に向けて書かれた普及書。学校図書館、地域図書館での利用に向いている。

編集者より

『ミューズ』は、この日本語版をもとに英訳され、国際的に発信されてきましたが、INMP（平和のための博物館国際ネットワーク）のニューズレターが定着しつつある状況も考慮し、今後、英訳版は全文ではなく、抄訳の形で発信される予定です。